

〔論 説〕

現代マーケティングの現実化 (I)

—マーケティング通観—

長谷川 博

はじめに

自然科学 (≡量子論) とのあいなり⁽¹⁾がない哲学一派による形而上学否定は、現代の現代における前進を阻む「哲学の自己否定」を孕むことになる。同様の事態が、宗教と神仏学、そして科学 (≡分類学, 実証学, 実験学) と不非科学—ここまでもいうのは社会科学の宿命—についてもあってきた。だからこそ、「それらの谷間こそが山場になる」ことを、行為上で更に「問題／課題」として取り組むならば、「現代化—現代化 ×」／「現実化—現実化 ×」からの「過去—未来」₂にあった (る) それぞれの「複数現在化」, そこにある選択についてもより鮮明化せざるをえない。因りて、「知りえる—知りえない」／「語りえる—語りえない」からでるつぎを踏まえ、コンステレーション (包摂論がある諸学の連座配置) における「研学上で行為変容がある異動」—人事異動の狙いも同じ—の先をいわずにはおけない。①形式知 (知りえて語りえる知), ②暗黙知 (知りえるが語りえない知, 知りえないが語りえる知—前者が原義だが, あながち後者の蔓延を捨象できない—), そして③不可知 (知りえず語りえず黙すしかない知)。むろん, つぎを, それこそ脚下照顧し続けることにはなる。差異に情報があるといったベイトソン以後に「差異と同一の差異」がいわれたが, 「差異と同一の同一」もいえるので「差異—同一」₂という謂いになる。ところが, 「同一・同じ」—C「等しい」=ある観点では同一・同じ—ではない「差異」を言うときの, 「不」と「非」の使い分けの慣用的な定着はナンセンスであるから, 止むを得ず, 存在論的「不」と認識論的「非」という使い分けを設け, いずれにも「反」(2項対立), 「別」(2項対照) があるとする。というのは, 「有—無」₂にある「空」の捉え方には, 「洋の東—西」₂の世界時計において解釈逆転もでているからである。こうして食らわば皿までと飲む (マトリクスに再参入させる) ものは, はたして, 「毒／薬」なのか。末期にソクラテスは, 毒杯を飲んだのだが⁽²⁾。

そして, どういうマーケティング定義 (その解釈) や, 「人為的に実効的な『再』」なる「生産—流通—消費」—2次 (DC) 化のありなしを問わず—について, どういう理解—「『学者にならなければ／なれば』よかったんだよナ」という傍目に囚われず—を引っ提げた「理論／実践」の専門家が, ここからの本論をどう読む (飲む) のか⁽³⁾。とも馳せる思いから, 「現代マーケティングの現実化」と題した。そして, これが最後になるかと誰にも譲らぬ

(1) A. ベッカー／吉田三知世訳, 2021 (2018) 年。近著には以上がある。

(2) プラトン／納富信留訳, 2012 年。

(3) B. ラトゥール／伊藤嘉高訳, 2019 年。第Ⅱ節以降に係われば以上の参看後であって欲しいものだが。

つもりで買った還暦の椅子から、長過ぎぬ年月をかけて綴っていく。むろん、現代の「相互作用—相互浸透」₂の現実化過程（「取引化（協働化）—非取引化（競働化）」／「競覇—非競覇」／「乖離—非乖離」）に対峙する「総合—分析」／「教養—専門」の「不非可換—可換構造化」過程では、「自然—人為的世代」の交代問題があっても、誰がいれば更に、C₁的対立かつC₂的対照からの「CC」としてのマーケティングについて、一人ではできない問答をしたくなるのかとは思っている。あの二人たち、あの三人たちのようにも。

本稿の第Ⅰ節および次稿の第Ⅰ節においては、包摂論ありの厳密化においてコンステレーティブに前景化する再問題群化を、言及済み⁽⁴⁾のこと—「場」の閉殻論とコンセプト化論、4大説総合以後論と共同体論、そして資源資本主義論と3層化論—を経て述べるとしよう。東洋が西洋（「西欧（米）—東欧」／「西漸—東漸」）的近代化を通過した行為〔論〕的転回の段階にあればこそだが、言語的転回を承けて東洋（インド、中国、そして日本への東漸）の事（言）—事（言）の原義は言—にも遡及する。「哲学／科学」—「哲学／科学」的な論争も引き起こした仏教思想なども含む。“Science without religion is lame, religion without science is blind”と語ったのは誰だったか—は、「認識／存在」における「個別—普遍」₂／「特殊—一般」₂を、「仮言—定言化」してきた。であるから、〔米〕哲学の影響が弱く哲学を「考え方」くらいの軽い意味で使うようになっている面を、他山の石とできるわけがない。そして、第Ⅱ節では、包摂論あり通観からの新たな方位の条件を、CCのあるマーケティング行為論にも畳み掛かかる4転回（言語へ、行動へ、解釈へ、行為へ）⁽⁵⁾以後として見い出す。

Ⅰ 超越論：CCになる浚渫の典型

コンピューティング・パラダイムの申し子といえる「システム—環境」図式の擁護が未だにあれば、これへの懐疑も、「変異—選択—保持」₂を彷彿とする「ミクロ—マクロ」／「依存—独立」問題に連動する企業〔成長〕論に既に現れてきている。〔進化〕生物学では、変異については、遺伝学以後がダーウィンを越えた。選択については、非規準的（ロー・チャーチ）ではあったがだからと言って何も言っていないダーウィンを、結局はまだ越えていない。そして保持についてといえば、社会科学としては何が「包摂論ありの構造の構造」なのか—「包摂論なしの構造」は言うまでもなく—と真っ先に考えるので、「必要はすべて善に依存する。というときの必要と善のうちに境界がある」⁽⁶⁾と言われたことを、後稿に向けてもともかくリマインドして欲しい。また、「意思決定—実行」／「行動—活動」という〔消費者〕行為論でも、「心脳寄りの知情意—身体寄りの感知認」⁽⁷⁾という心身問題からの分析的な諸論の蓄積が続いている。だが、〔進化〕生物学と大差のない状態にあるので、この心身問題が発している物心問題から、専門の行方について思うところがある。日本の語用で馴染み深い「心—技—体・身」₂にある2項ごとからの「3つの判断」—いず

(4) 長谷川博, 2020年b, 95~121頁。

(5) 長谷川博, 2017年, 95頁。

(6) 長谷川博, 2020年a, 60頁。

(7) 長谷川博, 2016年, 42頁。

れにも記憶ともつかない遺伝子記憶が刷り込まれている。なお、以降で「精神」をいうときには、別立てとする—のうち、必ずしも「心₂—体₂」としての「技」に特化した判断だとは言い切れない「判断」論があった⁽⁸⁾。そこでいう判断とは、「—『物自体—固有（占有）』—『主観—現象』—『共有—客観（間主観）』—」—両端の太字ハイフンは筆者加筆—における「共有」が可能になるのは、「直観すなわち『感性』—推論すなわち『悟性』（分析、アポストオリな経験の総合とアプリオリな思弁的総合）」によるとされたことである⁽⁹⁾。この頸木を離れて立つ包披論ありの「通観」（分析的に与えられているものを総合⁽¹⁰⁾的に見直すこと）があって、さらに分析が進むものだと考えている。

線形的説明になるのかならないのかは、マーケティング・チャネル論での言い方をすれば、「B2B 段階でのインテンシブ—セレクトィブ—エクスクルーシブ」／「B2C 段階でのマス化におけるシングル—マルチ—クロス—オムニ」に収束する経路（理路）解釈に収斂する。人間として「自分という膜」があらうか［ウィルスのように］無かるうかだろうが、商品か貨幣かだろうが、言語か非言語かだろうが、これらにある「従属—自発的」な経路についても定義不足がないならば釈技は無用となる。だが、解釈〔論〕の余地が残るのは、対象との一致に至らない記号（□言語）の限界による。この世界で最たる共通言語の数学といえど、解釈ありなのだから仕方がない。という中で、「ネットワーク」論よりは「ループ」（永久機関ではない循環）論を進めたと考えた方がいい所論では、「スパイラル」（螺旋）という能記が多用されてきている。ループ論は、組織論での第1次ブーム期にあったネットワーク論—ただし既に、線形集積の延長以上に縁起的関係が前面化している⁽¹¹⁾—の日陰にどうもなったのではあった。とはいえ、それらにあるスパイラルの所期は、マクロとミクロのリンクを言えば尚更に、人間の構築物としての歴史と自然進化としての歴史の間の対立が、伝統からの断絶を徹底しようとするポストモダンのラディカル構築主義の批判的側面と、ポストヒューマン的なリベラル進化論の科学的側面という言説の二極化に、あるいはフィードバック〔の民主性〕そのものが「総合的構成の下向かつ分析的構成の上向」という2様構成のいずれかからの一方通行な決定—「抽象化—構造化—〔数理的な〕モデル化—『属人的な組織／不属人化するシステム化』』—になってきた（いく）場合を捨象しない、というのがポスト・ポストの意思決定〔論〕であろう。よってだが、包披論的に何処まで踏み込み「構築」されてきた（いく）のかが、煌々と前面化する。この意味でこそ、標準を問い進め、かつ先進を基礎から問い始めることは、行為（応用／実用）のための機会に「促進／制約」された行為それ自体の「質的発達—量的発展」／「持続可能—可能持続性」の「開（壊）発」に資する。

ついで、デュアリズム（□改良主義）の一筋縄ではいかず、糊塗の上塗りのような対話になるのは、本論が重視するつぎの流動化過程のどこかしらに、「原因—理由」への対応に断続（破綻）があるからだ、ということもリマインドして欲しい。「ユニバーサリズムが破

(8) 長谷川博, 2020 年 b, 96～97 頁。以上では、「技—術」について言及あり。

(9) I. カント／篠田英雄訳, 1961 (1787) 年。なお、「反省概念の二義性に対する注」(346～366 頁)を、本稿の注 2 と対照する必要がある。

(10) 長谷川博, 2014 年, 24～26 頁。以上では、拡張進化論としての「総合のそして」には言及してある。

(11) Barabasi, A-L, 2016.

れたかのようなロイヤリズム」→「ディ／トリ／テトラ・レンマ」→「2／多重拘束（ダブル／マルチプル・バインド）」→「2／多元論化（スペクトラム化）という乖離（分断）化」→「DC(2次化)の地表を要する『[中立]—以下省略—選択の螺旋と包披』におけるCC」←「1元論化（ソライティーズ化）」←「共重合（コポリマライゼーション）」←「[ディ]レンマの鎮静化の代償ともいえるパラドクス」←「ニヒリズムが破れたかのようなオポチュニズム」⁽¹²⁾。として、選択の螺旋と包披の4層（遺伝子レベル等の生命、個体、集合体、自然）における任意の2層間については、共起ネットワーク（テキスト・マイニング）、何処までを「1」とするのかの座標系の複数性、そして2項対照連鎖に蓋をせず、「対象」への接近—「知ろう／語ろう」、そして「共有しよう」となっても、共有できたとして済むのは一旦だろう—を問答し続けることに、社会科学の錠前（ロックとキー）があると考えてきた。

その問答に不可欠な対象関係論は、後稿で図示する「縁(関係) [性]」を巡る「AI—HI」₂のチャック内にあるDCとして巡られるといっておくが⁽¹³⁾、まずは図9-1の語用を経る。

Iを「実体かつ実在」、IIやIIIについてを「実体(実在) 寄りの実在(実体)」, IVを「実体でも実在でもない

	独立（他で説明できない創発性）	依存（他で説明できる被還元性）
その根底にあるもの	I	II
変化していくもの	III	IV

図9-1 社会科学における「認識—存在論」₂であるところの接近対象

もの」とする語用である。定着し切った「実在」の捉え方には、つぎがある⁽¹⁴⁾。(a)「あなたか私かあるいは特定の誰か」がそれについてこうであると考えた内容から独立しているもの、(b)「あなたか私かあるいは特定の誰であろうとすべての人間」がそれについてこうであると考えている内容」から独立しているもの、ということである。だが、上記(b)は「非」存在の証明に向かうとはいえ、ここから退去するばかりではダメなので—非存在の仮構についても現象学を挙揚するが、西洋気触れでは終わらない—、上記(a)について反や別の解釈が提示されて、(b)の認識に影響しつづけている。神秘⁽¹⁵⁾的な合理主義者・合理的愚者⁽¹⁶⁾は、(b)を探究している。「特殊—一般」／「個別—普遍」／「実体—実在」の共起的な混乱を考えない「理論／実践」は、量子論と哲学のあいなりを知れば、これからのものとはいいい難い。こう言うのは、必ずしも哲学的定義に終始せずとは言えそこにある可能性を失わぬためと、「第1—第2—第3性」⁽¹⁷⁾の「切り取り／つなぎ合わせ」—経験曲線を踏まえた経済性は最小作用として定義されていたが⁽¹⁸⁾、最小作用とは言ってもパワー・ゲームを経た末の妥協と不妥協の産物がある。妥協の産物は、それで済む短か過ぎぬ状況ならば妥当とさ

(12) 長谷川博, 2020年a, 55頁。以上に加筆。

(13) 本論前連作の未読者に向けて言う。n項のうちの2項ずつのDCを「2次化n-1」(n-1はローマ数字で表記)という。「A—B」₂にある「A₁ (AはA), B₁ (BはB)」をまとめてC₁, 「A₂ (BなるA), B₂ (AなるB)」を纏めてC₂という。A₂とB₂は、非可換構造か可換構造になる。添え字は1次(FOL), 2次(SOL)を示す。そして、「A—B」₂のBに「Aでない」を代入すれば明らかな容中律になる。

(14) De Waal, C., 2013, pp. 125-139. 以上に基づく。

(15) G. ランダウアー／大窪一志訳, 2020 (1903) 年。以上がいう新しい中世は小乗仏教的である。

(16) 長谷川博, 2020年a, 63頁。2021年, 175頁。以上でいう賢者や愚者。

(17) 長谷川博, 2017年, 96頁。以上で言及済みのパースの言説は、SOL観点を入れると理解が促進する。

れる一にある包摂論のなさを避けるためである⁽¹⁹⁾。ここがなければ、冒頭で言ったペイトソン⁽²⁰⁾以後にはなりもしない。FOL 観点で第1性や第2性の複数性を踏まえたネットワーク論にはなっても、政治主義の壁を越えないと一若手研究者は越え始めていると訊くが一、図9-2の捉え方を前面化することへの違和感が消えないだろう。ならば、SOL 観点の第3性における「創発の自由」一必ずしも因果系列では説明がつかない一を生きるということが、どうも理解できないままになるであろう。

	C ₁	C ₂
C ₁	第1性	第3性
C ₂	第3性	第2性

図9-2

さて、下記の第1と第2についても、2項対照連鎖はある。第1に、「不非規準（西洋流に言えばカノンについてのノー／ロー・チャーチ）一規準（ハイ・チャーチ）」／「選択（みずから選ぶ意味のチョイス）一被選択（選ばれる意味のセレクション）」において「顧客との距離性における分業的分化から成る」階層性の中での絶対性と相対性が、社会科学では問題になる。とはいっても、「売り手一買い手市場」／「普及上での希少化一コモディティ化」／「サンドイッチソーセージ⁽²¹⁾」／「脳の筋肉化一筋肉の脳化一決して洒落にならないことだが一」において、相対矛盾における「原因／理由」が起りとなる「動く運命」の分かれ道と、絶対矛盾における「原因／理由」が起りとなる「動かない宿命」の道次において、「埋没させたくない」有（無）体資産「蓄積」と対する覚悟はあろうが。よって、[外挿的な直観の外れを待ち構えているかのような]本質的偶然などの様相（「存在しないことが一存在することが」／「できる一できない」⁽²²⁾）も加味され、原因と理由が、「一様ではない」選択圧つまり篩に「かかる／かける」というときの「番手がある」篩として付き纏う。理由を言うほど、文化のちがいが顕著になる。ところが無論、こうした諸要因は、事実あってもうまく言葉にできなかったり、逆には言葉にすることでその事実の本質が、掃いて捨てるほどある事実を言わないまでも、見えなくなったりはする。

この点を、おざなり、なおざりにした過去の穴が宿痼となり云十年間に未来を何とも棒に振ってきた、という思潮の引く気配はここへ来ても乏しい。その云十年間とは、第1次世界大戦の前後からプラザ合意（1985年）や日米半導体協定（1986年）を経て20世紀の実質は終わり、1990年代初頭に歴史の新段階に突入したという理解にある区切り以後のことである。つまり、その理解から、リーマン・ショック（2008年）を挟み、マーケティングの発達段階における一層の現代化が急がれてきた。では、2項対立構造を実体的安定だと、これまでの帰結に傾けぬ結果視一無意識（不言語）にせよ有意識（言語）にせよ一は、果たして2項対照上でどのように有意義なのか。また、図9-1でいういずれかの性質

(18) A.D. チャンドラーJr. / 安部悦生ほか訳、1993年。最善への最小作用の数学としては以下がある。I. エクランド／南條郁子訳、2009（2000）年、73～125頁。

(19) C.S. パース著／C. ハートショルン、P. バイス編／米盛裕二編訳 [1985]、7～41頁。以上に基づくが、以下も参照した上である。S. モスコヴィッツ／古田幸男訳、1983（1974）年、11～14頁。荒山正彦ほか、1998年。J. ホフマイヤー／松野孝一郎・高橋美規訳、1999（1996）年。G. ハーマン／上野俊哉訳、2019年。長谷川博、2019年、30頁。

(20) Bateson, 2000（1972）, pp. 279-308.

(21) 長谷川博、2019年、34頁。

(22) 長谷川博、2019年、36頁。図5。同、2020年、58頁。図6-4。

がある2項対照の連鎖がある人世とはいえ、またぞろ喧しきテクノクラート論に輪をかけるようにして「ジオクラート」とはよくもいったが、完人世からの「人新世⁽²³⁾」における「資本新世⁽²⁴⁾」への言及がある。これは、新問題群の前景化(「ソサイエティ5.0」「インダストリー4.0」)のひとつとして、「4大要因／第4変革」への新対応や資本の捉え方を示そうとしたとは思えるので、後稿でいう。

そして、小(中小企業)を潰していくのか大(大企業)を潰していくのかという実しやかな論議が、不思議なことにある。引鉄を引けば何かが壊れ、2度と元には戻らないのか。人間は好都合だろうと不都合であろうとも真実を知る(知らされる)ほど、誰もが自由になれるのか。これらに対するためにもなるが、つぎから、人波に擦れただけの「必要—善」／「自由—新自由」の再考には終わらせたくない。①「経験—思弁」／「分析—総合」／「形式—内容」／「情報が増えない—増える」において最も有効だとされた決定でさえ、硬直化すれば思弁(「経験—思弁」₂)の創発から自由を奪う桎梏となる。ひとまずいえば、自由[意志(思)]とは、1粒子(個人)でいうならばつぎの(a)と(b)を含意し、2粒子(個人)でいうならば(c)を含意し、そして決定論が真のときとしては後述の②を含意すること⁽²⁵⁾。(a)決定論が偽のときの「リバタリアンの自由」、(b)決定論が真でも偽でもいいときの「両立論的自由」、(c)2粒子(個人)のペアが「量子(ミクロ)もつれ」にあるときの半自由⁽²⁶⁾—細部組織をいうだけでは見えてこない日本の組織論につながる—。②日本には、天神と地神、三教(聾瞽)指帰、神儒一致、神仏習合・混淆—神仏分離や神社統合という権力による政策決定と、非権力側の「不抵抗／非関与／拝跪」があったことによる—、そしてカトリックの失敗を訓として布教したプロテスタントとの習合化という、幾度かの異教習合があった⁽²⁷⁾。いずれの習合も、弁証⁽²⁸⁾では単になく、DCであったといえる信仰の行動様式(エートス)が生じたと見做している。また、「予定説—因果律—縁起律」₂において⁽²⁹⁾、宗教の学的側面に「合理化」があったと見做している。そして③「自

(23) Crutzen, P.J., 2002, p. 23.

(24) Bonneuil, C. and J.-B. Fressoz, 2016 (2013).

(25) 長谷川博, 2020年b, 110頁。以上にある図5は、4つのすべてを含意する。

(26) Barabasi コヒーレンスの量子力学。自由意思、局所性、決定論という過程、コンウェイ・コッヘン

(27) 空海／加藤純隆・加藤精一訳, 2007(797)年。鈴木大拙／上田閑照編, 1997(1958~63)年。末本文美士, 1996年。小堀桂一郎, 1999年, 251~278頁。伊藤聡, 2012年。森和也, 2018年。以上に基づく。なお、唐では儒教や法家は官僚に、道教は庶民に広まったとされている。これらが影響を受けた仏教思想や、その残滓を取り払ったかのような思想が、日本では、平安京から平城京への遷移後の奈良の南都六宗や後に2(3)宗が加わった平安八(九)宗の言語—言語に拘らないために言語に拘っている—以後といえる現代仏教思想までの表現には、「上—中—下部」₂の地表をつなぐ行動、解釈、そして行為がある。

(28) 梶山雄一, 2021(1997)年。11~27頁。以上でいう捉え方での仏教的な弁証のこと。

(29) つぎがあった。①パルメニデスによる「同一律」、②ゼノンによる「矛盾律」、そして③アリストテレス論理学に至る「排中律」からの「肯定または否定」という2[価]値論(C₁ 相対, 対立, 分業原理がもたらした分離・乖離, 分別知としての合理性や価値という標準)。以上に対し更につぎがあった。①' 上記①の逆律であるカントによる「先験的総合判断」、②' 上記②の逆律であるヘーゲルによる「有矛盾律」、③' 上記③の逆律であるナールガルジュナ(大乘始祖)による「兩是(容中律)と兩否」(DCからのC₁やC₂への判断停止、違と異の即、寛容と不非寛容、因果と縁起、分離や乖離のない「個体よりは流体や気体というべき以上の体のなさ」、無分別知としての合理性や価値の新標準化、2重螺旋化における新しい価値の意味の在り処としてのCCへ)。

由度（入れ替え可能な変項数の多寡）—不非自由度（相互承認の必要度）」を、近現代至近にいかにかえるのかというマトリクスへの再参入（線形的な折り込み、非線形的な織り込み）があった。その再参入は、次稿でいう3パワー間にもあるのだが、「適応（創造）による適応（創造）の排除」を回避しようとしてなのであろう。よって、マーケティングの伝統的大命題である「適応—創造価」₂をいうにおいて、西洋的近代化路線や世界において「東洋の日本—日本の東洋」—日本の東洋史学呪縛がいわれる⁽³⁰⁾—であることを以ってしても、「科学へ—科学から」／「還元—創発」／「権威—資本—民主」を突き抜けようとする執着が、「精神—霊性」／「分別知（ロゴス）—無分別知（レンマ）」／「階型論理（FOL）—2次化論理（SOL）」など色々に言いえる「C₁—C₂」の葛藤を執拗に生んだ。

第2に、自然的な影響関係（時計回り）と人為的な影響関係（時計回りと逆時計回り）による「参入—脱参入—再参入」—第Ⅱ節で言うが、一国発展段階論に対する世界時計からの適応拡散の地政学も含む—を、社会科学では無視できない。上述の「進化」生物学上での境界化の件と同様で説明するほど分からなくなるのか聴かなくなるのかということもありそう—単純化といえ、こうしたことへの応答以内とは限りえない—だが、希望的観測に対する「延期₂—投機₂」といったことが見いだせる「状態／状況」もある。とはいえ、現代に未だ封建制—純粋家産制的・オリエン的なものは、社会関係一般を血縁関係に擬制しつつ、絶えずオリエン的な専制国家に帰結していく傾向を持つとされる⁽³¹⁾—に戻る発想が影響すれば、現実逆時計回りする。しかしながら、語りえる（えない）ものについての「現象論的」言語ゲーム化に対峙する「未分にある対称性からの破れにおける『数理／弁証』—その破れの破れにおけるDC（2次化）からのCC」にかかわる「4つの知」[創発性論、中立選択論、[古代的な]中動態論（C₂）、発生論的共生]などのマイニングは、むしろ時計回りの針を早回すとして、同様の意味で他にも言えそうな知については後稿でいう。

この4知を知っただけでも分かるように、寛容論的に正しい文脈化理解を必要視しているといわれる歴史主義は、それが線形的「還元主義」だと言えなくなる歴史上でのつまりは「織り込み」を、少なくともつぎからのCCに向かってこそ、[テキスト]マイニングしてみせられるのかとは言っておく。歴史には、言うに言われぬ論理などもあったからである。①分別知的な階型論理やこれに立脚した原理を前提とする語用上でのコンフィギュレーション⁽³²⁾も含むDC的コンステレーション（「間専門」化的な7変項の連座配置）という「学際／超学」問題、②C₁的理解も含むDC的コンプリヘンションという理解問題、③C₁的スペクトラムにおける「両極知りの両極知らず」も含むDC的ソライティーズからの線引き問題。というのは、CCなくばとして敢えて言えば、次稿でいう3パワーが互いに互いの温床を蓋えば、ますます突破できない閉塞を呼び込むことになるからである。そこで、意識領野における「構造—現象—解釈」₂という視線のDCと実はそこにあろう「ワーキング・メモリという創発」仮説については言及してある⁽³³⁾。そして④資

(30) 白鳥庫吉／榎一雄ほか編、1971年。以上についての以下を発端とする。Tanaka, S., 1993.

(31) 大塚久雄／小野塚知二編、2021（1946）年、207頁。

(32) H. ミンツバーク／池村千秋訳、2015年。以上においてソライティーズを言うようになる以前からあった語用である。

(33) 長谷川博、2020年、51頁。

本制の運動は C_1 なのか C_2 なのかに尽きるのかということ。7変項の「対内／対外」においても、たとえば、ここから生じた（る）無視できないサプライチェーン課題がある。すなわち、「資源を採ってくる—資源のある方に入っていく」／「ディスカバー—エンカウンター」／「植民地化（領土 2.0）の現代化（領土 3.0, 昨今）—更なる現代化（領土 0.0 といえるかをここでは問わないが領土 1.0 における、領土 4.0 化）」という、歴史上で幾度と繰り返された試みと、今後に根を下ろすのかの兆し（特に領土 4.0 につながること）である。ここでは、「物理—不非物理」／「資源—不非資源」／「選択ありで決まった世界でのリフレクション—選択なしに決まっていた筈の発生論的共生（非 ALT 共生）の世界でのリカーション」における「内部／外部化」の限界を知らながらも、動いていないという罪意識に対して動いていることによる「納得」を免罪符にしたエントロピーの放出し合いが、しわ寄せを生まなかったとはいえなからう。

こうして、「問題／課題」における CC 的な「問答—解決」の現実化が、つぎを経て、それぞれ現代の現実化を増殖させると考えるのは序の口過ぎない。すなわち、①「遺伝子や神経から拡張された」ありとあらゆる表現型「の発生現象」については、つぎがいえること。図 9-3 における「Ⅰ—Ⅱ」（DC における C_1 ）

	機能	構造
機能	I	IV
構造	III	II

図 9-3 「機能—構造」₂

としての要因に還元するシステムティック論と、「Ⅲ—Ⅳ」（ C_2 ）としての要因からの創発をいうシステムック論という、2 様のシステム論がある。よって、「無機—有機」／「機能—構造」図式以後に標準化してきた「システム—環境」図式ではあったが、後述するように「主観—客観」図式が再前面化した。そして、「原因（理由）をたすけて結果（帰結）を生じさせる作用」という「縁」（えにし）に着目すれば、変量「生産—流通—消費」におけるコスト・パフォーマンス（ベネフィット）だけが価値ではないことは明白である。よって、「モノ—コト」₂／「物象—心象化」₂を媒介するコミュニケーション—本論では特に商品や貨幣が絡むコミュニケーション—から成る「関係の意義」を価値として問いもする顧客維持からのマーケティングが、関係「性」マーケティングとして論及されようとしてきたのではなかったのか。②上記①を経ての、結合ないし統合的構えの内実をいう仮説の発見と正当化への探求に資する超越論的な「主観—客観」批判論といえる現象論（第Ⅱ節でいう図 9-6）的な解釈との共重合ということ。自然科学の先進との「対応—整合」が付き纏うが、存在論が端的にはつぎの場合に頭をもたげる。通常にはチェックされず「真実（トゥールズ）視」されることよりも奇なりと、主観レベルの現象から共有されたと思しき客観に反転がある—太陽の昇沈という事実視にすら、半球の南北で反転がある—ことである。マーケティングにおける IMP グループ⁽³⁴⁾でもその根底には、現象論があると考えている。ある 7 変項諸論が難解視されるとき、 C_2 と CC の理解に不十分な面はなかろうか。そして、現象論は量子論の発想や「中観／唯識論」以後の思惟（思繹）に補われるといっておくが、階型論理への反対論者のうちにも、これらの裏づけがない者はいるようである。

以上を詳しく論及しようとするれば、 C_1 かつ C_2 からの局面で言うところの「必要—善」／「自由—新自由」以後への「寛容の根拠となる非寛容／回折／干渉／重合／浚渫／場の

(34) HaKansson, H. ed., 1982.

閉核」からなる CC を、 C_1 や C_2 に固執してしか読み取れ（取ろうとし）ない者が下記（1）や（2）だとは言い済ませられなくなるよう、破れ気触れ—事大主義にも逆転がある—に溜まってきた手垢の落としとなる下記（1）' や（2）' の説明を、漸次施していくことを含んだ行論となる。（1）や（2）の上塗りから浮き足立ったままで、下限が保障され同時に将来への可能性も保証される位置を得ようと藁にも縋り続けるのか。この繰り返しすら已むことなく続く「世代対内—対外間」の破れが、「権威—資本—民主制」の破れそのものだったとは、誰しもが思っていないのか。文化論でもよく言われる「内発—外発」₂ のループやネットワークやスパイラルを弁えるという前に、ともかく民族の神話を学ばなかった民族や自国の歴史を見失った国や学の末路⁽³⁵⁾が過ぎる。そういう「事（言）の顛末」に相当することが、日本にも少なからずあってきた。このことが現代の7変項に伝わり足りていかなければ、（1）や（2）のままになり続けるだけのことだ。以下でいうときの「思想」—[政治主義の] 思想を凌駕せねば社会科学はない—には、宗教上の聖義—たとえば色（空）即是空（色）—、衣鉢をより科学的に纏ったドグマ—たとえば、「内（外）の内（外）が外（内）」—、安定的に保持されているそれらという意味でのパラダイム、政治色を帯びたイデオロギー、これらに対する一般民衆（フォーク、衆生）の思惟様式を含む。

（1）主につぎの2点を挙げる。①つぎの2系統[の事（言）]について確認されている「古代／中世」思想への渉猟（比較考量）の欠片もいつしか失せ、近現代の新知識獲得に忙殺された「西洋／西方（オクシデンタル）₂—東洋／東方（オリエンタル）₂」がない、「志向気触れ」ないし鵜呑みに過ぎなくなった「一方任せ（頼み）」。後述するが、その2系統とは、ギリシャ思想の西漸系統と、インド思想の東漸系統を指す。西漸や東漸の系統はアフリカ起源説からすれば「乖離—不乖離」₂の中にありなるにもせよ、東漸系統の方が量子論の発想を先取りしていたということがある⁽³⁶⁾—だから日本の物理学者は優秀なのかと西洋では言われているそうだが—。これをサプライチェーンのビジネス問題として言えば、「グローバル（外部環境の縮小）—ローカル（外部環境の拡大）化」／「文化的コヒーレンス—デコヒーレンス」／「コーディング—デコーディング」／「パワー行使—コンフリクト管理」の限界規模に横臥していた再構造化問題が、端的にはフランチャイズ・ライセンスにおけるザーとジーの逆転として浮上したというわけだ。②図9-1（9-2）に帰着する1（多）なる多（1）についての無知（無明）と実践上の具体的トラウマによる青い鳥探しの余波に打ち上げられたままかのような、「システム—環境」図式（「エンバイロメント—ミリュー

(35) A.J. トゥインビーが典拠のように言われもするが、彼の著作上には不明。

(36) 世親、400年、『唯識二十論』。以上の四訳対照研究が以下である。宇井伯壽、1953年。近代以後だが、東漸系統での現象論的視座の「対立／対照」には以下がある。①「2元論的に絶対（超越、乖離）から個別主体を包摂しようとする」西洋哲学に媒介された「精神」を浄土教の「本願選択（せんじゃく）」仏教に媒介させた哲学（「正反合」の西洋弁証法ではなく「主客会」の仏教弁証法）により仏教に到達しようとした清沢満之（1870（1892、95、98、1902、03）年）と、1元から始まる東洋の「霊性」（仏教的論理の根本である「即非の論理」）の中へ西洋の精神を包み込もうとして仏教から哲学への方向で禅と浄土教からの総合仏教を目指した鈴木大拙（1907、1944年）。②その関係を知る人は多からうが、「仏教から哲学—哲学から仏教へ」において親交があった鈴木大拙と西田幾太郎。③田村元（1937年）や西谷啓治（1960年）とディレンマとしての老荘思想論理とテトラ・レンマとしてのインド大乘思想論理を言った山内得立（1974年。酒井修編、1993年）。そして④シェリング（1951（1809）年）と王弼（2010年）。

(milieu)」止まり)や、「主観—客観」図式(ないし「独我論—相対主義」／「モニズム—ニヒリズム(コアナーキズム)」止まり)への現代の過剰依存。

(2) まさかのファシズムのまさかの復活や、[ステルス化した]エンデミックの場合もある文化的ステレオタイプとしてのアナーキズム。これが節穴化だとしてもすべてを葬りえないできた。なお、前期資本主義と近代資本主義が別物であるように日本の封建制と民主制が別物であるにせよ、「ナショナリズム—パトリオティズム—トライバティズム」からの「忠誠／反逆／抵抗」という「ネーションの意志」⁽³⁷⁾—「ルソー流の一般意志₂—自然意志₂」として現実化するにせよ—にかかわるのだが、封建制(封建的支配者層、封建諸侯・家臣団・豪農・豪商などの中間層、農民などの一般民衆)下での民主制の夜明け前にあった「隠岐島コミュン」⁽³⁸⁾にどのような社会的力が加わったのかという史実を通じて表現されてきた面はある。

上記(1)の①についてだが、中国では6世紀には密教(タントリズム)系以外の訳業は衰微したので、以東の仏教は7世紀以後のインド仏教に疎くなっていったとされている。そしてインドでの仏教滅亡(1203年)後には、この系統に「属す—属さない」ところの中国思想(原儒、儒学、道学)の域—日本の密教はシャーマンの意がある「儒」からの独立面もあったが、文化4類型⁽³⁹⁾に収まるといえるのか—への遡源が主になったとされている⁽⁴⁰⁾。日本の神道学(上[座]部)は天皇制の根拠にならないと皇国史観に、日本の仏教学(上[座]部)は鎌倉仏教史観に、それぞれ否定的である。だが、外圧だけでなく内的に「上[座]部—下[座]部」の乖離が広がらなければ、いずれの史観も下部から自由に復古する—ドラヴィダ語圏の影響が、ヴェーダや反ヴェーダに復古したように—ことがある。ゆえに、いずれの史観も、日本の下部においては長らえている。よって、「上部—下部」／「構造—機能」では捉え切れない社会構造—日本でいえば、天皇が出家して法皇になった時代の「権威—資本—民主」からなる社会構造—への、後述する3つの「目的／手段」に照らした中間層構造の加味(再参入化)がないと、古代や中世や近世や近代のいずれかが頂点化しただけの現代の現実化になる。(1)の②についてだが、たとえばヴァレラ⁽⁴¹⁾が「システム—環境」図式を懐疑して仰いだ「中観／唯識論者」は、「主観—客観」図式を懐疑する「神秘的合理主義者」—仏教では言痛い面もあり「神秘」は「妙[用]」というべきか—であったと考えられる。同様にして、原始仏教に焦点を当てる経済学者もいる⁽⁴²⁾。

上記(2)についてだが、ともかく「近代化」してきたほど、それがどのようなものであった

(37) 橋川文三、2015(1968)年。大塚久雄、2000(1955, 1956, 1967)年。J.O. アームソン／雨宮健誌、2004(1988)年。法然／大橋俊雄校注、1997(1204)年。以上も踏まえている。

(38) 松本健一、1994年。松本侑子、2013年。

(39) 長谷川博、2019年、33頁。以上の図4のこと。

(40) 以下の流れを追った、ギリシャ／インド／中国／日本の論理についての考究の蓄積がある。東漸系統にあるニヤーヤ学派の古代論理⇔龍樹(ナーガルジュナ)→3人→新因明、陳那(ディグナーガ)→7人のうちの法弥(ダルマキールティ)によるインド仏教哲学の最後の知識論『タルカパーシャ』の注釈書。M. カラグプタ／梶山雄一訳、1975年、49～68頁。以上に基づく。なお、儒家に関しては、現代の新儒家にも注目できる。

(41) F. ヴァレラほか／田中靖夫訳、2001年。F.J. ヴァレラ著・談／岩見徳夫訳、1999年、80-93頁。

(42) C. ブラウン／村瀬哲司訳、2020(2017)年。近年では以上がある。

かとは問題視される。[弱小な国家における]文化ステレオタイプ・ニヒリズムは、「支配—自分気触れ」という問題に向かいながらも、アナーキズムを宿し易い嫌いがあった。たとえば、小乗仏教も、自己解脱をいうことから小乗諸派でニヒリズムを生んだ。だが、一方の大乗仏教の「空観」—神を見ない科学の目はここに向かっていても言われてきた「無自性」や「三性説」—をニヒリズムと捉えるのは間違いだと、多くの印哲学者や日本の仏教学者は、「支配—自分気触れ」でもなく見做している⁽⁴³⁾。ニヒリズムについては、第Ⅱ節でもいう。

そこで、まずは斜めに跳ね上げてみせよう⁽⁴⁴⁾。「反動」の語用にも、「自然—人為」₂におけるC₁という反動とC₂という反動がある。孔子と老子の間の思想にはC₂における反動もあると見做せる。そして、ここにインド思想—ヴェーダ→バラモン→ヒンドゥーという「正統バラモン系統」に対して「反正統バラモン」として前500年頃に起こったのが原始仏教や六師外道⁽⁴⁵⁾—が参入した思想の終着が、日本「中世」⁽⁴⁶⁾の奈良時代—仏教シルクロードにおける南伝を除く—だったわけである。よって、ギリシャとは極めてちがうこと⁽⁴⁷⁾が重要なインドから、日本にかけての東漸系統の本流である大乘思想「史」研究「の考証」⁽⁴⁸⁾を踏まえる。こうして、「日本中世の事（言）」に遡ることで忘却—ただし記憶ともつかない遺伝子記憶に残っているとしよう—の彼方に新鮮さを覚える先進的なことを、明治維新时期以後の西漸系統由来の「西洋的」近代化の前からあった「原」近代化だと認識すれば、事も物（法）も再考する基礎として甦る部分が重たくでてくる。たとえば、“liberty”の訳語に仏教用語の「自由」が当てられた⁽⁴⁹⁾。だが、それで自由をlibertyと同じものだと理解するようになってしまい、東洋由来の意味での自由を考えられなくなったといわれている。ミルでは、「必然が自由」というときの自由の説明にはなっていない。「自然—社会現象」の法則は人間疎外だが、それでも東漸（老荘の自然法思想など）では、人間が自由を覚える法則が必然だというわけだ。日本の自由については後稿でも言う。そこで、言

(43) とくに日本の密教—空海以前（雑蜜）と以後（純蜜）がある—では、本地垂迹説（神は仏のアバター）による神仏混淆が顕著である。そして、悟り—これが仏教の中核提供財—の知恵姿として大日如来が曼荼羅（思考を放棄した神秘的直感に逃避せず、人間が自己否定を通じて蘇る世界あるいは縁起）の中心にあるのは、仏教の空思想が神の存在を認めていないからである。以下がある。宮坂宥勝・梅原猛，1996（1968）年。立川武蔵，1998年。本地垂迹を逆手にした反本地垂迹説（仏は神のアバター）の果てに、魔仏毀釈があった。

(44) この言い回しに出くわしたので、やはりそうかと読み進めた以下がある。A. ネグリ・M. ハート／水島一憲監訳，2005（2004）年，同，2012（2009）年。

(45) D.T. Suzuki／佐々木閑訳，2016（1907）年。以上については正統バラモン系のヴェーダーンタ学派に近い思想があるとのプサンの指摘（1908年）がある。これを踏まえた仏教研究へのながれがある。

(46) 日本の封建制との係わり（貴族、武士、封建、民主化）から、日本の「神代—古代—上代—近世」における上代と近世の間に識別された区分になる。内藤湖南，1911年（kindle版）。以上は応仁の乱（1467～1477年）以後に見出す区分。これをさらに遡る区分では、日本の近代が鎌倉時代に始まるともいう。小堀桂一郎，2010年，89～130頁。中世諸説については以下がある。黒田俊雄，2020年，253～284頁。

(47) J. ゴンダ／鑑淳訳，2002（1948）年，7～45頁。インド亜大陸域の自然環境，土着人，アーリア人の進行，仏教の滅亡を招いた改宗を迫るイスラム教徒の進行の影響を言う。

(48) 宇井伯壽，1953年。長尾雅人，1978年。富貴原章信，1989年。法蔵・宗蜜／小林圓照・木村清孝訳，1989年。北畠典生編著，1997年。横山紘一，2016（2002）年。桂紹隆・五島清隆，2016年。

(49) J.S. ミル／中村正直（別称 敬太郎），1872年。以上は、意志のlibertyに対する市民的ないし社会的libertyをいうものだった。

(名)が生んだ「物象一心象化」という観念表象(コ情動)には、次節や後稿でも折々に例化する⁽⁵⁰⁾。

(1)' 奈良平安時代の六学(衆)派についての事(現象)と理(真如)による識別⁽⁵¹⁾を、事と理のDCにしてみることで、つぎを考えるきっかけになった。① C_1 のみ、② $C_2 < C_1 (= \alpha)$ 、③ C_2 のみ、④ $C_1 < C_2 (= \beta)$ 、⑤ [西漸的] CC_α 、⑥ [東漸的] CC_β —ここを言うのが本論主眼ではなくあくまで例化素材として同定してみればだが、①律、②法相、③三論、④天台、⑤真言、⑥華嚴—唯識の法相(付宗化した俱舍、説一切「有部」を基礎に経量部へ発達)は中観の三論(付宗化した成実)に、三論は華嚴—西田哲学は華嚴に向かった—と真言に影響を与えたと言われているが、図9-1(2)について量子論的によほど科学的であったといえる「認識—存在論」の種子⁽⁵²⁾があった。3つの時間—「色(事)→空(理)→色(事)」における左側矢印が示す移行における現象の時間、目的が達成された瞬間の空の時間、右側矢印が示す仮説(言葉によってその存在を示すこと)後の時間—があるが、②から⑥は、円了流に言えば、ロゴスがレンマによって聖化されるとともにロゴスとしての性格も失っていない状態として、現代状況の素材になる。

(2)' 「日本の事(言)」としての、文化ステレオタイプ・アナーキズムを説明するだけでなく、逆に人口に膾炙しなかったデフォルト(原基・初期設定)としてのアナーキズムをなにもほど慎んでいたと見做せるのか⁽⁵³⁾。西洋啓蒙主義のように「宗教に対し神なしで道徳⁽⁵⁴⁾を基礎づける理性」をいうのであれば、封建制を通じてあった「感情に基づく規範である『礼』—「仁」と「礼や楽」との表裏のほかにも、「孝」あつての仁が言われている⁽⁵⁵⁾—もこそ、西洋の理性論から東洋の共同幻想⁽⁵⁶⁾が、かれこれ維新150年か戦後80年か、つくられたままで終わらぬよう—いずれもが宿している虚妄と疑うべくもない新しい真実があることを巡る論議⁽⁵⁷⁾が再燃するときがあろう—、つぎの①をつぎの②のようにも再考できる。①日本の事(言)に根差す考え方からの標準「制度/管理」以後—リゾームの長さで反比例する開花期を、じきに迎えるのか—。誤解の向きがあるのならだが、「価値からの自由ではなく、むしろ価値への自由」だと、言っておいた方が穏当なのだろう。というのは、諸学説等の一定の価値観や価値解釈を寛容することが、ウェバーのいう「価値自由」だからである。この言い方に沿えば、不非寛容は「価値不非自由」と

(50) E. バンヴェニスト／前田耕作監修／蔵持不三也ほか訳、1986(1969)年。以上も踏まえる。

(51) 井上円了、2012年。立川武蔵、2003年、284~336頁、うち297頁の図19。より直接的には以上を踏まえた。ただし、そこでは律についての言及はない。

(52) 宇井伯壽、1953年。

(53) M. モース／吉田禎吾・江川純一訳、2009(1925, 1950)年。D. グレーバー／高田岩三郎訳・構成、2009年。R. キンナ／米山裕子訳、2020(2019)年。以上を踏まえている。

(54) F. ジュリアン／中島隆博・志野好伸訳、2017(2002)年。J.G.A. ボーコック／田中秀夫訳、2021年。

(55) 池澤優、2002年。加地伸行、2015(1990年の増補版)年。

(56) 吉本隆明、1968年、7頁。以上では、「個人が個体としてではなく、何らかの共同性としてこの世界と関係する観念のあり方のこと」を指す。だが、集団の共同幻想は、成員たちの賢明な側面あるいは平均的な側面を共同化したものではなく、集団の中の賢明あるいは平均的な個人よりも愚かであるともいう。

(57) 榊原昭夫、2009年、392~492頁。以上でもいう丸山眞男(1952年、1964年)と大熊信行(1964年)や、山本七平・小室直樹(2016年)。これらの二人たちを埋没させたままのCCは心許ない。しかも、2階の政治と「制度/思想」の食い違いなき展開が必要。

の言い方にはなる。「必要（正選択）—不必要（負選択）—留保（中立選択）」／「善（正）—真」における価値評価は、不可能性定理が至当し、むろん証明できない。すでに主客未分価値や競争的使用価値にかかわる周知の論争⁽⁵⁸⁾があった。それでも、「[交換] 価値（貨幣の世界）—変換価値」₂からの価値論には後稿でいう。②〈法〉の穴は、「自然—実定」／「勝義—世俗」／「マクロ—ミクロ」においてある。この穴を、「法[制]」が埋め尽くせないところに有らしめられるのが、〈礼〉である。むろん「礼[制]」には、「西洋—東洋」₂の地勢により、遺伝子よりも強くでる「[言語] 文化／文明力」のちがいが適応拡散的に反映される。たとえば、「[原] 儒学的な礼を考へることが、昭和20年代以降の日本では薄らいだ。「倫理／道徳」⁽⁵⁹⁾には、つぎがある。①カント流の規範倫理（社会性を第1とする定言的な絶対倫理）、②シェラー流⁽⁶⁰⁾の価値倫理（苦渋の決断を要するような他者との関係の中での仮言的な相対的倫理）、そして③有徳倫理（社会と自己のつながりを追求しつつ自己が善を為す習性を高める修養的倫理）⁽⁶¹⁾。マーケティング・コンセプト研究も上記①が主流であったが、この①は法制に代替されていくものなので、後稿では②や③もいうことになる。むろん、「必要—善」／「自由—新自由」以後の場合と同様に「主観（能取）—客観（所取）」図式への構造論的現象論を挙用するにおいては、「儒学—道学」₂を経由した日本の大乘仏教学を不可欠として踏まえる。

さても、歴史的発展の全過程において「現代が歴史の頂点である」とする前提⁽⁶²⁾が否定されるとするならば、このマクロ前提よりもミクロ前提—遺伝子文化共進化よりも、生を受けし者の閉鎖関係に起因する社会「後退」⁽⁶³⁾—で、現在が思い描かれているからだろう。本論は、「日本中世にみる原近代化（日本の仏教の近代化）—江戸後期にみる日本型近代化」⁽⁶⁴⁾—明治維新时期よりの西洋的近代化—國體の本義⁽⁶⁵⁾—近代の超克⁽⁶⁶⁾や世界史的立場と日本⁽⁶⁷⁾—戦後の西洋的近代化」を踏まえた現代の現実化に関与し続け、前連作における「専門からの総名的な名指し」である「マーケティングの星座（コンステレーション）」や、「マーケティングの幹（ステム）」に内包させられる諸見地（知見）を理り続ける。ユング派の心理学において、「コンステレーション」は未だキーワードである⁽⁶⁸⁾。本論でいうコンステレーションは、諸学の布置連座配置であるから、そこでの集合意識も「フロ

(58) 石原武政, 1976 年, 1993 年。石井淳蔵, 1993 年, 1999 年。

(59) 和辻哲郎, 2007 (1934) 年, 9~52 頁。以上があるのだが。以下では、ラテン語由来の倫理とギリシャ語由来の道徳という違いになるが、倫理は社会の期待を、道徳は個人の性格を強調するという。B. ウィリアムズ／森脇康友・下川潔訳, 1993 年, 10 頁。

(60) M. シェラー／樺俊雄・佐藤慶二訳, 1935 (1926, 27, 28) 年。後述するシェリングへの言及あり。

(61) J. マクダウェル／大庭健編者・監訳者, 2016 年。大庭健編, 2021 年。

(62) 津田左右吉, 2006 (1934) 年。152~176 頁。以上に基づくので参看されたい。

(63) K.R. ポパー／内田詔夫・小河原誠訳, 1980 (1950) 年。以上も参看されたい。

(64) R.P. ドーア／松居弘道訳, 1970 (1965) 年。

(65) 文部省思想局, 2018 (1937) 年, 文部省教学局, 2018 (1941) 年。

(66) 河上徹太郎・竹内好, 1977 (1942) 年。

(67) 森哲郎編著／西田幾多郎・西谷啓治ほか, 2000 年 (1943 年などの合本)。

(68) C.G. ユング／林道義訳, 1999 (1934-1951 の論文集) 年。河合隼雄, 2010 (1995) 年。玉城康四郎, 2021 (1990) 年。井筒俊彦, 1991 (1983) 年。ユング派の河合は、唯識論とは異なる大乘起信論から共時的構造論をいう井筒を踏まえるが、玉城は縁起は共時性だけではないと業熟体をいう。

イトーユング」₂の地平に織り込んでいる。現代の現実化とは、過去と未来が現代において結合し、つくられるものからつくるものへと動いていく時空において、絶対(相対)矛盾的自己同一の見方を持ち、現代が現代自身を限定するということである。

Ⅱ 包披論あり通観：新たな方位の条件

実情としては、「満足化する組織—[その満足化下で]最適化するシステム」₂／「マクロ寄り—ミクロ寄りの意思決定(政策／戦略)」₂／「形而下の合理—形而上の合理すなわち神秘・妙用」₂が、この世界の選択螺旋⁽⁶⁹⁾の「円滑／蹉跎」にかかわる動きをつくってきている。しかも、諸組織[間]で人間が何を行為するにしろ、「権威—資本—民主制」／「公共—小さな公共化」が言われてきた。ついては「認識(合理—経験)—存在(実在—観念)論」₂の現代化版として、本論は「アトミズム—ホーリズム⁽⁷⁰⁾」₂／「メレオロジー—メログラフィー」₂／「テレオノミー—テレオロジー」₂／「相関—接触主義」₂を挙用してきている⁽⁷¹⁾。とはいえ、それらの言説も、「特殊(一般)が全体(個別)を経て一般(特殊)へ」／「個別(全体)が一般(特殊)を経て全体(個別)へ」—諸組織[間]の「ループ—ネットワーク—スパイラル」にあるプリミティブ構造について一方が他方を倒錯者と言い済ませられない逆転がある包披論の原理の抽象表象—における「重合化」を対象とするのは変わらない。重合には、①差異から同一に向かう過程での重合、②同一から差異に向かう過程での重合、そして③上記①と②に共時性のある重合がある。互いに否定し合うだけでなければ、それらの重合を「終点」とするばかりではない更なる行為として、「人—社会」₂そして「国内—世界的な覇権」₂の状況で3パワー間に生じる破れが、グローバル化という近代化過程からの現代化として可能なのである。

そこで、西漸系統由来の「現象論／構造論」と東漸系統由来の「唯識論／中観論」のDCを前提とし、「論理(L)—原理(P)—道理(T)—コンセプト(C)—枠組(F)—仕組(C′)」を、次稿以後で稿立てしていく。このとき、図9-4をイメージ図⁽⁷²⁾とする地表に新たな方位の条件として、(1)人間論と共同体論や(2)言語[コミュニケーション]論と事実がもつ価値関係に触れる構造論や現象論に生じてきていた知見、そして(3)情報論と実在論にとって生じてきている知見を、しっかりと歴史に位置づける「加上⁽⁷³⁾」が、再重合に向かうよう一旦は差異に向かうために必要だと考える。「なぜ市場が見えなくなったままなのか？」といえ、それは同図の斜線部面(東漸系統)にある点線部が見えなくなったからだともいうが、次稿第I節の時点で再整理(地表を3軸化)できるようにするにせよ、これまでからすれば以下の変項群をひとまず列挙

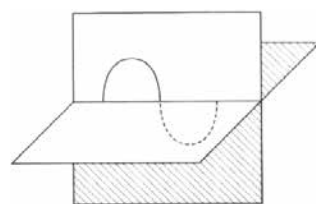


図9-4 地表のイメージ

(69) 長谷川博, 2012年, 7頁。2021年, 41頁。

(70) Breyer, R.F., 1934. 以上は、商品／機関／機能別接近を含むホーリズムである。

(71) 長谷川博, 2019年, 44～45頁。2020年, 59頁。

(72) V.E. フランクル／諸富祥彦監訳／上嶋洋一・松岡世利子訳, 1999 (1978)年, 90頁。

(73) 富永伸基／石田瑞麿訳, 1972 (1744)年, 77～123頁。

できる。①「予定—因果—縁起律」／「変異—選択—保持」／「満足—最適化」／「不非均衡—均衡化」／「自由度—不非自由度」／「変換—『供犠／贈与』—互酬的交換」。②「心—身」／「西漸系の精神—東漸系の精神（霊性）」／「倫理—道德」／「有縁（『地縁—血縁』）—無縁」／「自己—他者（『超越—超越論』）」／「欲求（ニーズ）—欲望（ウォンツ）」。③「共感に基づく公正競争による物質的豊かさ—機会均等による多くの人々の競争参加—全体としての物質的豊かさよりも不遇な個人の選択幅の拡大を優先」／「6 政治形態（≡民主制）—資本制（『共同体を破壊した—企業内へ共同体が滑り込んだ資本制』）」／「組織の機能集団—新旧共同体」／「身（職）分—階級」。④「資源（『ネットワーク』資産—負債）—一場（取引の場）」／「貨幣—代替貨幣」／「資本の拡大—不非拡大」／「損得の加速あり—なし」／「安全—危機（危険）」。

(1)「生命情報—社会情報—機械情報」の倫理面をどう言おうが、ポストヒューマン、ホモデウス⁽⁷⁴⁾、そしてレジリエンス人類⁽⁷⁵⁾といった言説の加速における「最大—最小」／「幸—不非幸」の追究上、エウダイモニア⁽⁷⁶⁾の再考（生の成功、生きた心地、意味の実現、自然な幸福）が再燃してきた。自分の世界にとって信頼できる基礎をつくり出すための意思作用を括弧入れ（エポケー）することで、エウダイモニアへの根本関心が新しく始まる。どの「組織⁽⁷⁷⁾—システム」もがエウダイモニアに干渉する限り、7 変項連鎖へ拡張しようとも社会的関係にある「制約—促進」の中での「必要な行為の〔被〕選択」において、つぎの対照化からの再考があわせて不可欠になる。すなわち、「苦のないことが幸せである」という典型的な消極定義にかかわる「ホモパティエンス⁽⁷⁸⁾」という人間像と、四苦（生老病死）の無常をいうことから始めた仏教との対照化である。ひとまずいえば、前者では、成功と失敗を両極とする軸と意味実現と無意味（絶望）を両極とする軸の直交座標において人を捉えるが、決定論対汎決定論も考えれば、原因と理由の混同には批判的であり、還元主義こそが今日のニヒリズムの正体だという。後者では、四苦無常は、本来は克服すべき否定的対象であった。それが本覚思想の影響で、不覚から始覚という過程を経て本覚へ向かえば肯定的対象になるということが、日本人の人間観のひとつになったが、そこには墮落に結びつく要素も多分にあったとされている。

東洋人だけだとは言わないが「超越論（勝義、聖門）的な他者」—有神論や汎神論や弁神論に対し超越論は無神論—に立ち向かってきたあの二人たちやあの三人たちから生まれてきた（くる）人間（CC 者）たちは、日本の資本主義にかかわる共同体ひとつとってみても、東洋史学呪縛どころか昭和の呪縛を解放する「〔持続可能な〕差異をつくる〔可能持続な〕差異」の地表に入っていくほど、直面する「個別者（世俗、浄土門）的な他者」—たとえば、事物を人間中心に考えたいくに対して自然科学者がいう「諸学（≡「合意の計算⁽⁷⁹⁾」）の工学化という猿真似」など—に閉口はしまい。農村落的な伝統的な共同体

(74) Y.N. ハラリ／柴田裕之訳、2019 年。

(75) 稲村徹也ほか編、2022 年。以上では、レジリエンスを、広くは「危機を生き抜く知」と定義する。ただし、著者によっては、レジリエンスを適応過程、レジリエンシーを個人の能力とも分け、多様な環境に適応した人類集団の共感力などが言及されている。

(76) アリストテレス、1971 年、21～54 頁。

(77) 長谷川博、2020 年。図 4、104 頁。

(78) V.E. フランクル／諸富祥彦監訳／上嶋洋一・松岡世利子訳、1999（1978）年、49～62 頁。

(79) J.M. ブキャナン／加藤寛監訳、1977 年。

1.0⁽⁸⁰⁾、この各地での希薄化を補填するかのように高度経済成長期までに会社内に滑り込んだ共同体2.0—日本の資本主義は、この意味で共同体を破壊しなかったとされる⁽⁸¹⁾—、そしてその後としての共同体3.0を本論は言っている途上にある。共同体2.0は、対内的組織行為と対外的組織行為の原理⁽⁸²⁾を履き違えた組織内パワー・ゲームに無力な時もあった。実存のない自動性を扱う側にあるニヒリズム—還元主義下の様々な「西洋的近代化の」変種自体が実はみずからのニヒリズムに行き着いている—は、ホムンクルス主義に帰着せざるを得ない免罪符への企及を隠蔽しつつ求め続ける方法論的ファシズムとなる。こういう面に対してデフォルト・アナーキズムから発生するのが、CC者の非ALT共生(ALTに止まらない共生)にも通う共同体(態)3.0すなわち新しい共同体である⁽⁸³⁾。「想像力、意味の解釈への自由意志(生理、心理、社会的に制約されているが、そうしたみずからの環境や状況に向かっていかなる構えをとるかという点について、非常に幅広い解釈能力をもつという意味)からの共有は、美人コンテストでの投票結果としての共有とは歴然として異なる⁽⁸⁴⁾」。そこでいう幅広さは、「深くなるほど厳格にいいよ拒否的となる形式(保証がなくても補償や保障があるほど翳される立場)を固定して増やす内容—その内容が減っても固定しない形式」₂を、「合理—神秘・妙用」₂/「精神／霊性」₂から考慮して初めてみずからの志向そのものを露にし、接近対象(図9-1)である存在の「現代の現実化にとっての」本質(二様相)的価値(有意味)性を明らかにするものだと考える。

すでに、人間については、「ホロン—クリナメン—プラト—」からのC₁者とC₂者、そしてCC者という区分に言及してきている⁽⁸⁵⁾。C₁者やC₂者に都合のいい他者ではない「他者」たちとの共生を志向するのがCC者(二「競働—協働」₂からの「共生」のマーケット)である⁽⁸⁶⁾。科学が挑んでいても説明し切れていないことを含むが、これまでに対象化されていなかった事物を語ることに意義があるならば、その言は何らかの既成概念(事実)に対立(照)する概念(事実)の能記としてキーワードになる。CC者にとっては、C₁者やC₂者に都合がいいだけの「その言や空なり」といおうか。こういえば無論、あの二人たちやあの三人たちだけでなく、「合理—神秘・妙用」₂(論理と原理と道理の相克)をどう実用するかなんだよナ、と途端に察する諸賢は居よう。彼らは、不非可換的構造化となるC₁の現代的現実化である乖離性—たとえばロック流の政教分離⁽⁸⁷⁾—が根深くあれば、可換的構造化となるC₂の現代的現実化である非乖離性が根深くある—C₁的2項区分の残滓があるからかC₂の2項区分を固定してしまえば、世俗的には元も子もなくなる場

(80) 大塚久雄, 2021 (1955, 1956) 年。以上に基づく。

(81) 小室直樹, 1997 年, 251~255 頁。以上に基づく。

(82) 長谷川博, 2020 年, 図 2-5, 41~42 頁。

(83) 長谷川博, 2019 年, 38 頁。本論はアセンブリッジと名指ししてきていた。なお、以下の2論には後稿で論及する。A. ネグリ・M. ハート／水嶋一憲ほか訳, 2022 (2017) 年。R. ラジャン／月谷真紀訳, 2021 (2019) 年。

(84) V.E. フランクル／真行寺功訳, 1972 (1951) 年。同／山田邦夫・松田美佳訳, 2004 (1984) 年。以上に基づく。

(85) 長谷川博, 2014 年, 17~33 頁。

(86) ここでいう他者と以下でいう他者にズレが少ないほど親和性は高くなる。中島隆博, 2022 年 (2011 年の増補版)。

(87) J. ロック／加藤節・李静和訳, 2018 (1689) 年。

合がある—と先ずは共有した上で、主体性の発（生）成変化（図9-5）を、現実態（FOLのPDCA）に「ない」から「ある」に「なる」こととしていう。現実態にあるものが可能態に働きかけるとき、SOLのPDCA'も回れば、その現実態にあるよりは完全化する。

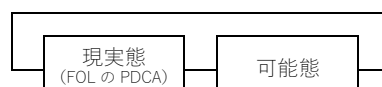


図9-5 主体性の発（生）成

ある態が現実態に働きかけることで、SOLのPDCA'も回るようになるならば、それこそが可能態といえる。存在〔論〕的に〈本質〉は可能態から現実化され、現実態となる。本質は実存によって限定され、実存は本質によって規定される。この限定と規定についての還元主義一辺倒に抗するのは、説明された通時的因果系列の中にさえ、説明されていない創発や縁が実はあるという場合が否定できないからである。この点は、後述の（3）ともかわる。C₁かつC₂からのCC⁽⁸⁸⁾も、単な重合化に止まらなければ現代の現実化においてより価値（意味）がある発（生）成変化の総合としての「実存→新実存」になる。

（2）西洋啓蒙主義の言語を突き崩した言語論的転回—構造論、構造（機能）は違うが機能（構造）は同じだという「構造／機能」主義に由来する—を経て、普遍という名の共有化として〈概念〉が求められるようになったのは西洋の反省からであった。そして、物（道具）としての言語観に立つ言語構成説に対して現れた言語過程説⁽⁸⁹⁾は、「詞」と「辞」の区分で辞を中心とすることが日本語の特徴中の特徴であるが、「自立語」や「詞」を中心化していることに現代主流のコミュニケーション・モデル⁽⁹⁰⁾の問題があるとした。解説的表示—契約論化になるばかり—である製品仕様書は止むを得ないとしても、顧客に通じる言葉としての製品コンセプトや15秒以内に顧客をキャッチする広告コピーで選択できる現実に可能な行為はどうかとなれば、マーケティングでも耳が痛い。ところがその一方で、[社長よりも厚遇される]飛び抜けて有能な営業ピープルは、あれこれと詞を並べ立てる（知の過剰訴求）以上に辞の駆使に先天的にも長けていて、その話を顧客が自然と聞くようになっていく関係をつくりだしている。自他の区別が消えていき他動詞と自動詞の区別すら消えていく面—中動態説がいう中動態化の本質—はあろう。以上は、マーケティング・プロモーションにおいて、人的販売がより主となる場合に咀嚼されてしかるポイントである。

問い方から考え直した未知の式を編み出すためにも返ってデジタル化し易からうとは思いつつ、本論は、複雑な絡みを単純化表記できるので言語構成説的な構成上でも使い易い情報の形式化（「A—B」／「C—D」／……は無論、「A—B」₂、「A₁—B₁」,「A₂—B₂」など）はしてきた。だが、それと同時に、[足し算的に]意味論的に「附属語や辞」に拘って

(88) 長谷川博, 2019年, 38~39頁。以上で引用済みだが、本節の意図を実用へと展開するには、以下の理解を要するので再掲する。「ある命題（P）と矛盾するものやそれと反対のPを信じることから、もともとのPを信じないことが帰結する、という考えには同意できない。互いに矛盾する複数のPを信じることは可能であり、その矛盾が容易には看破できない微妙な場合だけでなく明白な場合でもである。しかし同時に、あからさまな矛盾を信念／動機として帰属させることは、誰に対しても控えねばならない。ここでくれぐれも必要なのは、矛盾する複数のPを信じることと、その矛盾を信じることを混同しないことである。つまり、前者は『Pと信じかつPでないと信じること』であり、後者は『PかつPでないと信じること』である」。

(89) 三浦つとむ, 1981年。時枝誠記, 2007年, 2018年。加地伸行, 2013（1977の大幅加筆修正）年。

(90) 長谷川博, 2021年, 54頁。

もきている。また、インドで衰微した仏教の世俗化上での二の舞をコミュニケーション上で踏む面があろうとも一日本の仏教は、禅宗などのように不立文字化したままで済んだが、「A—不／非 A」の A が一般化されたシンボリック・コードであっても現象論的に〈it〉と捉え直され—当初には“it”と読まれもした I[C]T にはそう読まれてしかるべき面が [D2C の]DX 後ですらまだある—、認識の背後に何かが横臥することを示す限界（極限）概念となっている場合がある。ともあれ、日本では中世以後になってから東漸系統の漢語の訳業を経てのことだが、ヴェーダーンタ（ウパニシャド）や三教（三仏教）を踏まえていた東洋の言説はその風土上からも「詞にしづらい事物」すら表現し始めていた訳で、この前面化は言語過程説の言語観をそれこそ要する。ゆえに、不非契約論的な東漸系統を知れば知るほど、西洋発の量子論の発想は既に東洋にあったという根拠—西洋の大家による「梵（ブラーフマン）我（アートマン）一如」の観照もあった—⁽⁹¹⁾が、一顧だにされなくはなからう。ただし、後代人がみずからの時代の事（言）や文化の影響を抜きに、先代人を理解するのは難業であるから、洋の東西を問わず後代人による先代人の理解には「未来が過去を変える」ような「認識上の変異」がとり憑く。それでも、13 世紀以後になってからの訳業を経て初めてだといわれているが、ユダヤ教やキリスト教の影響があまりない紀元前のギリシャ哲人をも踏まえた西洋（西欧、東欧）の言説が、適応拡散中の諸文化圏を席卷し、ある文化圏ではそれが相対的に色濃く継承⁽⁹²⁾されもした。こうして、宗教だけでなく、ある西洋が世界的になってきたという歴史がある。翻って、日本中世にみる原近代化（日本の仏教の近代化）—江戸後期にみる日本型近代化—明治維新期よりの西洋的近代化—國體の本義—近代の超克や世界史的立場と日本—戦後の西洋的近代化」を包摂論なく再延長するだけで運ぶ現代の事（言）は、むろん限られてきている。しかも、そういう実情に蓋することはできなくなっている。

人間にとっての価値（生活を〔合理的に〕建設していく中で演じる役割により重要だとして選択した事物⁽⁹³⁾）への構え（三例化）にはつぎがある。図 9-6 の I は、他（多）者との共通確信を構成—共通確信と無関係ではないにせよ—せよ、どこまでも純粋に個人の内的確信でしかない確信。①は、「価値の本来の場／よいと評価されると思われるものすべて」を、自己の内部にあるものとしてみる「利己的構

	個別（特殊）	普遍（一般）
主観	I（三①）	III（三③）
間主観	II（三②）	IV（三④）

図 9-6 現象論の認識構成区分

(91) シュレーディンガー／岡小天・鎮目恭夫訳、2008（1944）年。宇井伯壽、前掲書。

(92) 長谷川博、2014 年、26～29 頁。遺伝子文化共進化の 3 重継承モデルについては以上で言及済み。

(93) D. デフォアの『ロビンソン漂流記』は、「外の世界」へと逃出したロビンソンが孤島に漂着し、それまでの「内の世界」の事物が別の物（心）になる「物（心）象化」—金貨を蹴飛ばしてみたり—からベター・ミックスしつつサバイバルすなわち自給自足の私的労働—節約、希少性を前提とする配分総量としての総労働が均衡する雛型—を始めたが、やがて再びイギリスでの生活という「内の世界」での社会的労働に戻れて「めでたしめでたし」となる物語である。大熊信行（2003 年、1929 年の復刻版）は、この物語への K. マルクスによる言及から、価値法則の根底にある生産労働の合理的「配分」と労働成果の合理的「分配」いう scheme に言及した。特には、「おもふに分配における完全なる正義の実現は、……」（203～204 頁）を参看されたい。また、大塚久雄（1966 年、97～131 頁）は、A. スミスの『道徳感情論』への導入として同物語に言及し、先の内の世界に相当するデフォアの『イギリス商人大鑑』物語や、めでたしめでたしの裏物語だと『ガリバー旅行記』にも言及した。なお、宇野弘蔵への久留間鯨造の応答（1957 年）がある。

え」・一面のスミスに由来する人間の膜としての「自己利益」。Ⅱは、Ⅰからやがて多くの
人々や組織の間で共有される確信。②は、価値の本来の在りかを自己と他の「事物／自己
たち」との関連の中にみる「関係的構え」⁽⁹⁴⁾・もう一面のスミスに由来するセグメント化
された「他己利益」。Ⅲは、科学上での転回をもたらすコペルニクス的な確信。③は、価
値を独立した一領域として、もともと「われわれとかわれわれの関係の内部にあるもので
はない」と人間疎外的に位置づける「絶対的構え」。反コンステレーション的にあらゆる
ことを独壇場にする全体主義（トータリズム）は、そうして何度か繰り返される科学的転
回（人間疎外）の経験過程の一方に生じる自然疎外であり、民主制すら墮落する帰結の背
後にある。そして、本論でいうコンステレーションにおいてさえ包披論が欠落すれば、現
代の全体主義に逢着しかねない。Ⅳは、Ⅰ→Ⅱ→Ⅳ、Ⅰ→Ⅲ→Ⅳという2回路において「人
間—自然疎外」₂を踏まえた普遍化的間主観認識としての確信。法則ありなしを考えれば、
すべてを必然に取り込もうとするのではなく、法則なしの本質的偶然（後述するシェリン
グの「原偶然性」）も構想することになる。④は、ヒューマニズムが入るには入るが上記
①から③の「結合ないし統合的構え」⁽⁹⁵⁾。すでに、「ある事物自体の価値や事実を目的
的な価値や事実として求めるのか、それとも究極的に欲する事物のための手段的な価値や事
実を求めるのか」という提起⁽⁹⁶⁾があった。これも踏まえれば、④でいう価値とは、「内在
—外在」／「目的—手段」における「有機的統一」である。このⅣでは、ある対象への直観
や推論（演繹、帰納）の内実を自己と他者がコミュニケーション—aをbが真であるため
の証拠とみなすことを、コミュニケーションの本質要因とみなす—し、諸現象から「絶対
なこと」ではなく「共通なこと」（構造的同一性）を取り出そう、すなわち現象からの構
造に至る「本質—様相」をいよいよ看取しようということになる。人や社会がかかわって
いるかないかではなく、人や社会のかかわり方の違い—自然科学と社会科学の違いもで
る—によって、客観性は意味づけられてきた。上記いずれの構えからにせよ、それらの構
えに「不覚」がなかったのならば過程（「始覚」）上の墮落が、なりゆく存在の新たな方位
の条件を見出せぬまま、科学〔技術〕の可能性（実効性）すら阻むのである。

(3) 分けてもDCなのであるが、インド亜大陸とはちがって風光明媚であったからこそ、
目に見えるものだけにに基づいていたギリシャ由来のプラトニズムからの2世界論や精神論
を欠いた動物寄りの心身論である umbelt (milieu) 論は、超越論的に先進化している科
学理論〔枠組〕に迫いつかぬ標準理論以下 (under par) となるばかりである。そこで、「無
底」⁽⁹⁷⁾の言説構造を、ともかく次段落以降で「参入（守）—再参入（破）—脱参入（離）」
することから始めよう。というのは、「宗（衆）学／哲学者」が無底（C包披）は「声字
実相義」⁽⁹⁸⁾や「無谷」⁽⁹⁹⁾との相同性ありと認めていると見做しているからだけでなく、
DC（C「離散—収斂」₂、「形而下—形而上」₂）からのCCへの始覚にとっての引証になる

(94) Gergen, K.J., 2009. 以上は、関係中心主義である。問題は関係を結ぶという生成における発生の中身だが、以
下のようなフロー（ゾーン）の現象学も重要。M. チクセントミハイ／今村浩明訳、1969年。

(95) 長谷川博、2021年、169頁。

(96) M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫訳、1996（1904）年。

(97) F.W.J.V. シェリング／西谷啓治訳、1951（1809）年、102～202頁。

(98) 空海／加藤精一編、2013年、66～99、162～176頁。

(99) 王弼、2010年。井筒俊彦／古勝隆一訳、2017年。安富歩、2017年。

と考えるからである。ただし、シェリングの随所に巧みな表現（訳出）に感服し変更をな
んら施し得ない箇所が多々ある一方で、「内内外、外外内」を加上した解釈を差し挟まざ
る得なかった不肖な諸点、とくには「内」を「包披」と変更した箇所がある。

「限定は否定なり」という箴言は決して当て嵌らず、下記①や②の限定とは遠く懸け離れ
ている限定とはなにか。①外からの限定（被る選択）や、②内からの限定（個々の行為の
原偶然性・全き偶然性を導き入れる「恣意均衡の体系」、これを否定し一切の行為の経験
的必然性を主張するところの「決定論の体系」、あるいは「カントのいわゆる予定論」一昔
から、人間的行為に想定され原偶然性が、神の悟性のうちに前以って計画された世界全体
の統一に対する関係において、自由の教説における最大の障害をなした。それで、神の予
知も摂理も断念され得なかった以上から起った想定一）。これら①や②は、社会現象につ
いての単に覆面せる偶然性を言っているに過ぎず、上記のものはすべて、唯心的なるもの
でも唯物的なものでも、その存在者の形而下に位する。それ故に、[2つの身分の] 観知
的存在者の行為は、自己の内や外のいかなる多（他）によっても限定されておらず、つぎ
に従っている。③「神（世界）—内—存在」である「観知的存在」の「底がみえる底」に
対する「底が[見え]ない底」すなわち、すべての2元論化の以前にある元底（urgrund）
よりもむしろこう呼ぶしかない無底（ungrund）による限定—今でも相変らずなされるよ
うに、上記②の経験的必然性と混同されてはならない—。1となっても或いは他（多）とな
っても現象するのだが行為の本質は、「無底の本覚への行」—本論で言えば既述の有徳倫理
の始覚がそうだが、本質に先行して本質をつくるもの—である。かの観知が、かりに彼にと
つての所与やみずからの素振りや心算（つもり）に過ぎない死せる存在であるならば⁽¹⁰⁰⁾、行
為がそれからただ必然性をもってのみ結果する以上、彼の責任能力や自由は廃棄され得る。

かかる無底は、観知的存在者の行為が結果（帰結）してくるところの、内容的な偶然（恣
意、自由）と形式的な必然の行為における両立（融合）であるが、観念論以後を標榜する
上では「包披的2次性」だといえる。少なくとも個々の行為における偶然的なるものの不
都合を遠ざけ、逆にはその都合に近づくこともできる。括握（コンプリヘンジョン）的な
観（見）方によってすら尚も絶対的2元論を宣言しない以上、無底はあらゆる対立（底が
見える底）に先行するのであるから、かの対立は、無底のうちでは区別され得ないだけで
なく、なんらか或る仕方存在するのでもない。したがって、無底は、対立2項の同一性
ではなく、両者の「絶対的というよりは現実的には中動態的に」無差別としてのみ言い表
わされ得る。

たいていの人々は、対立の消滅を認める他はなくなるまで考察を進めるとその対立の消
滅を以って無差別になったと言ってしまうことがある。「1—他（多）」／「単数—複数」—
他（多）が単数とは民主主義的現象、1が複数とは自由主義的現象—は、包披的2次性の
うちに実存するものとして、英雄の時代を招いた。そして、あらゆる神的とされる力が地
上を支配し、そして威力ある王侯として玉座を安泰なるものとした。眼に見得る神々の美
のうちに、また芸術や聡慧な学問のあらゆる光輝のうちに、自然に最高の莊嚴が与えられ
る時代が現出し、遂には包披的2次性に働きかけつつある「原理化」が世界征服の原理と

(100) 以下も参看されたい。Luft, J., 1961, pp. 6-7. これは以下でも引用されている。E.H. シャイン／稲葉元吉・尾
川丈一訳, 2002 (1999) 年, 173~198 頁。

して現われきたり、すべてをみずからに従属せしめ、1つの確固たる永続的な世界帝国を建設するに至った。しかし、そのように働きかけつつある原理化は、自分ひとりで決して真の完全なる統一を生産しえないのであるから、この莊嚴がすべて解体する時がやってくる。そしてこれまでの世界の美しい体軀が、おそるべき疾病によるかのように潰え、ついには渾沌が再び入りくる。やがて遂に分裂が起こって民族移動に入り、あたかも、かつて元初の大水が第二の創造を可能ならしむるために太古の創造界を再び覆ったかの如く、この諸民族の混乱は旧き世界の地を氾濫するのである。ここに諸々の民族や言語の新たな分裂、一つの新たな王国が始まる。そこでは生ける言葉が堅固にして不変なる中心として渾沌に対する戦いに入り、また善と悪との間に戦いが宜せられて、今の時代の終りに至るまで続く争闘が始りを告げた、と言うわけである。

だが、無差別は、そもそも対立の所産でも対立を潜在的に孕んでいるのでもなく（「対立の不非存在」）、すべての対立を離れた独自存在である。ゆえに、あらゆる対立が当って砕ける無差別は、なんらの述語をも有せず、有するのはただ無述語性〔という述語のみ〕である。だからといって、つぎのことは毫も差支えない。無底そのもののうちには、本論前連作から述べてきた2項「対照」コードの「分立」—三権分立というときの分立も3項対照コードの2次化Ⅱ（3点動化）と解せよう—において、各コードが述語される際に再定立される「原理の現実的な2儀」すなわち「2元論の連鎖からなる多元論化と、1元論化」を妨げる何ものもない。なんとすれば—シェリングがこの点までまだ研究を進めなかったのだと書いたことは、「メレオロジー—メログラフィー」₂／「対立—対照」₂を指したと解釈しているが—、無底が何者に対してとも全くの無差別として関係するというまさにその故に、それは多元論と1元論に対して等しい浚渫を導き入れるのであるから。

無底と実存（観知的存在）との間の区別は単に論理的なものではなく寧ろ非常に実的な区別であり、単に差し当りの助けに呼び寄せられ結局はまた本物でないとなるようなものではない、といわれた。ただし、「相對—絶対」／「同一—差異」／「矛盾する—しない」／「肯定—否定する」に纏わって西田も批判した「汎神論／弁神論」の謂いに対しては、本論は存在論的に無神論ではあるが、それにしても世界があるかないかにはかわるので、「内外、外外内」を言うほどに重要な新実存論や情報実在論にとっての保証から、解決により近づく前進が確認され则认为している。これは、マーケティング・イノベーションのCCにとっても同様であると考えている。

・・・・・・・・・・・・・・・・

さて、以上からまとめておこう。本稿で次後稿に譲ると記したことの組み直し（図9-7）もそうだが、これを織り込む後稿の展開は、むしろ包披論ありである。繰り返すが、分析的に与えられている事物を総合的に見直す「包披論あり通観」が、更なる分析を進めると考えている。「コンセプト（C）—枠組（F）—仕組（C'）」というつくりつくられていく区分化を「応用／実用的」にいかに示すかは、「BD—SWOT—STP—MM—SM、これらにかかわるMR」といったitsについてのマーケティング実学（「理論—実践」₂からのCC）ならでのことだ。マーケティングは「B2B—B(D) 2C」／「市場—中間組織—インターナル・マーケティングも言え内部組織（○部門間連携⁽¹⁰¹⁾、統合販社、直営小売）」への対応（「適応—創造」₂）である。そして、理論ならば「C—F—C'」という区分化の超越論にすらなるが、実践はむしろ特定スパンでその区分に超越然とする。よって、現代

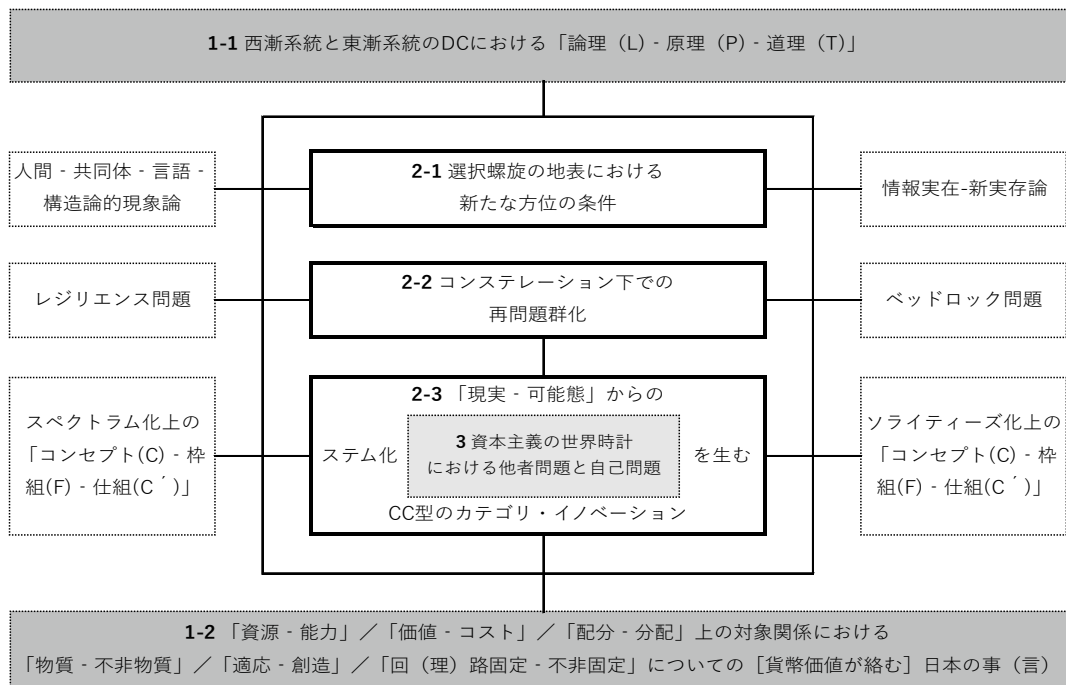


図 9-7 包摂論あり通観

の現実化のための学問発展に資する更なる分析は、同図からの「C—F—C'」の区分に「参入—脱参入—再参入化」をみずから促し、「形式の偶然—必然（不非自由）」／「内容の偶然—必然（不非自由）」からいよいよと分析の分析となる。

1 同一が先か差異が先かといえは「差異から同一へ」だけでなく「同一から差異へ」によるループからの先を考える戦略がないと、あらゆる場合に「情動」と行為の極端を避けるべきだという意味での「スペクトラム化上の」「適度」ではなく、それぞれの状況に応じて適切な事象に対して適切な人々に向かい感じた情動を、適切な理由をもって適切な方法で表すという中庸性⁽¹⁰²⁾のあるロゴス耐性すら付かなくなる。相補的であるところの「科学的構造—哲学的構造（現象論）—宗教的構造（唯識／中観論）」を擁し、「本質—様相」看取の不完全性に倦まぬようにと、関心相関性を言うのは、宗教的構造を含むという意味で広義の「構造論的現象論」でもある。既述の結合ないし統合的構えの内実に迫る仮説の発見とその正当化への探求の正しさの深層にかかわるものとしては、ここでも次稿に譲るが、言葉の意味にかかわってきていて科学的否定さえもが「信憑」だということにも対峙する、統計の哲学、圏論、そして IUT 理論⁽¹⁰³⁾がある。とはいえ、歴史の証人たちによれば、水よりも濃い血と乳と歴史との諸条件から『遊離した真理』ではない事実があった以上、自然科学的に根拠のない規範がむろん皆無にはならなかつ

(101) 長谷川博, 2007 年, 150~153 頁。

(102) アリストテレス／高田三郎訳, 1971 年, 68~77 頁。

(103) <http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/~motizuki/research-japanese.html> 望月信一の諸論文へのリンクがある。

た。ゆえに、「基礎的」な「L—P—T」かつまたは「応用／実用的」な「C—F—C」に対峙する真理制度論は、「マクロ—ミクロ」₂／「法則あり—なし」（「スケーリング—スケール・フリー」）において以下を踏まえることになる。

- 1-1 西漸系統と東漸系統が既述の (1)' や (2)' のDC から「ループ／ネットワーク／スパイラル化」して、「4つの知」に匹敵する知も拓かれていく「L—P—T」の地表から、以下が現代的に可視化されていく。現実化におけるソライティーズは、円環よりは下記③でいう様々な弁証法の理解にかかわるが、楕円（平面上にある2定点・焦点からの距離の和が一定となる点の集合からつくられる曲線）の思考だと言え、東洋的な合理性に照射できる——一切が発生してくる源たる「円環」か「楕円環」かの東西的なちがいはであるが、円環とこのうちの二者の、楕円環とこのうちの二者のオートポイエーシスを言っている。①「格差」をいうときには重要なことである「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」⁽¹⁰⁴⁾ という日本的にあった「必然的自由」という両立論的な文脈、②西田哲学の理論理性ではなくそれが実践理性化する際に1元論化したことへの批判、③「肯定—否定」／「過程—非過程」の弁証⁽¹⁰⁵⁾や、量子論からの統一理論化や数学の限界にアルキメデス支点をもたらしとする自然科学者の数理や哲学者たちの言説、そして④上記②や③が文脈の文脈になるとしても、「文脈—文脈の文脈」／「無限—超限」という言葉にさえ縛られない包摂論。ここでは、メビウス輪、クライン壺、山々⁽¹⁰⁶⁾、そして円錐（断面である楕円）、しかも膨張する円錐という図画イメージ化があるので、いずれをパンドラ箱というかでちがいは出ようが、その蓋の「開閉—割れ」——これが根底—に生じるのであるという「任意均衡—決定論」₂の捉え直しが、西田の批判もあったところの無底の解釈—辺倒に役立つ。
- 1-2 洋の東西を問わぬパワー・ゲームの発展を辿れば、「暴力—不非暴力」が絡むが「公—私」₂におけるC₂からでる超国家主義や超企業主義（DXにおけるデジタル・プラットフォーム）がもたらしている地平にある、[貨幣価値が絡む]日本の事（言）として、少なくとも以下が現代的に可視化されていく。①欲望からの行為と「倫理／道徳」的行為のパラドクスにおいて「シーリング下で」保障を与えるためのソーシャル・スコアリング（保障を得るためのポイント算用）、②e-環境主義や[デジタル・]シャドー・ワーク [における再搾取]の拡大、③保証の社会化に至る間で資産のみならず負債を内部化している[経営]行為。④その負債の内部化を[保険適用的に外部化して]配慮する[介入的]補償。
- 2 部門間連携を経たヒット商品の開発物語の場合は無論、「現実—理想」₂にある相互作用の壁を更には越えていく。誤解を生まぬように言えば、2-1（選択螺旋の地表における新たな方位条件の加上）と、紙幅の都合で次稿に譲った2-2（コンステレーティブなコンプリヘンションからのコミュニケーションのコミュニケーションによる再問題群化）

(104) 鈴木大拙や井筒俊彦も引用した松尾芭蕉によるその弟子への言だが、植物と動物の違いや都市と民族などへの以下の言及は踏まえている。O.A.G. シュベングラー／村松正俊訳、2017（1976）年。以下の第一、二、三表も参看されたい。同、1989（1922）年、57～65頁。

(105) 末本文美士、2001年（1970年改訂版）。

(106) 長谷川博、2019年、図1、24頁。

とには、同様の相互作用がある。こうして探求するのは、現実主義のお先棒を担ぐだけではない—ゆえに現実をよくみる—マーケティング・イノベーションにとっても、2-3 (下記3を孕みながらもステム化を生むところの、CC型カテゴリ・イノベーション) のためであるに他ならない。

2-1 公私 (国家と家族) に参入してきた「自然構造だといわれるような2つの身分—職分 (階級) [の3層化]」がある市民社会⁽¹⁰⁷⁾は、「無構造につくられた大衆社会」の中に細々としてはいても強いレジリエンスがある「中庸化社会」を生み出している。この中庸化社会からの納得が容易く獲得できないのは何故なのか。獲得できない側が中庸化社会を逆手に取ってきたからなのであろうか。こういうパンドラ箱を開いて行為しないのであれば、3つのデフォルト・ニヒリズム (理想の破砕であるファウスト的、自己の前面で崩壊する理想の傍観であるアポロン的、かかる理想を避け自己の中に退いたインド的⁽¹⁰⁸⁾) からの「方法論的ニヒリズム」が分からぬ—それこそ1-1が分からぬ—ままでの、「拍子抜け—再緊張」—それこそ1-2において—に喘ぐ文化ステレオ・タイプなニヒリズムに止まり続けるに違いない。

2-2 こうしてどんどんと地表の深いところで突き当たるベッドロック問題には、法則なし (スケール・フリー) な新問題もある。これによって、観 (見) え方が〈真理〉寄りに変わる [政治など7変項に跨るシーンでの] レジリエンス問題がある。これらの問題 (群) 化間の現実にある「リフレクション—リカーション」は、完成がないと言う「絶望への十分条件—希望への必要条件」—希望への十分条件はなく、絶望への必要条件はない—として、社会化する保証となり、少なくとも、ゾンビ化を生む寄生への不非寛容への保障を高める。

2-3 至上とされたが本覚に至りえない民主主義—ギリシャ・ローマには無限の概念はなかったもので、その古い部分さえも今日に適うように高めようと試みつつも—上の民主制再編論においても不十分だったのが、ステム化を生む方位への論議である。「本質—現象論は「2様の本質」をいかに扱うのか—が先か実存 (行) が先か」にある新しさの正体が問われる共同体論異説はある。だとしても、持続的イノベーションや破壊的イノベーション (ローエンド型や新市場型)⁽¹⁰⁹⁾ではない、「現実—可能態」からステム化を生むCC型のカテゴリ・イノベーションは、「アロポイエーシス—オートポイエーシス」／「PDCA—PDCA'」／「対称的パートナーシップから生まれたニヒリズム—非対称的パートナーシップにおける方法論的ニヒリズム」などを素材として「C—F—C'」の組み直しに影響する。すでに、家電量販店に対するメーカーによるエクセレントNBの価格指定には、「市場型—中間組織型取引」のDCからの方法論的ニヒリズムがみてとれる。

3 家電産業をはじめ自動車産業でも現実にもう大分そうになっていると観察が行き渡ってくれば強弁を労しないだろうが、「本節冒頭の実情」の実情と見倣せる「資本主義の他

(107) O.A.G. シュベングラー／村松正雅俊訳, 2017 (1976) 年, 28~49 頁, 167~233 頁。R.N. ベラー・島蘭進・奥村隆編著, 2014 (2014) 年。

(108) O.A.G. シュベングラー／村松正雅俊訳, 1989(1922) 年, 328~331 頁。

(109) Christensen, C.M., 2011.

者問題」と、姿を消していた生産要素である無形資産（C資本）という「資本主義の自己問題」にお構いなしであるか否かは、以下への言説を左右するほどに重要なことである。①「[等価] 交換—交換の外部（『徳のある善行として贈与しえないものを贈与する供犠—決定不可能性下での時点限定的に言われる贈与』⁽¹¹⁰⁾）」。②必然が人為的偶然力に負け続けてきた歴史の中のトリックスター（反秩序，利己的な狡猾，愚鈍，反道徳）。③比較流通制度分析でいうところの「日本型流通取引」に及んできている影響における「人為的選択圧の固定（乖離）—不非固定（不非乖離，アレントの定義⁽¹¹¹⁾）さながらの融解，マーケティングでいえばMWRの融合的定義⁽¹¹²⁾」。④「適応（創造）による適応（創造）の排除」を回避しようとする3パワー（「現実—可能態」／「機能—共同態」／「[パラダイムなどの] 外から—内からの眺め」における「擬制」士族主義の影響がある権力，閥門・権門化）間関係。⑤「文化以前—文化内（文化ステレオ・タイプ）—文化以後」／「デフォルト—リセット」における「ニヒリズム（コファシズム）—ロイヤリズム（コモニズム）」／「オポチュニ—ユニバーサリズム」／「ナショナリズム—パトリオティズム—トライバティズム」という資本主義発展の世界時計（多国間段階）。⑥介入の質と量に差がある「内部—中間組織—それらの残余である市場」の適応拡散（「ローカル—グローバル」₂）に対する領土（侵食）化のバージョン。そして⑦こう言えど「唯物—唯心」₂が絡んでくるのだが，唯物的な人種，住民（土着民と居住民），民族（精神／霊性の単位），国民（ある文化様式を為している民族），市民（あらゆる実際的なことを超越したところに存する自己の意義を意識するところのあらゆる「身分—職分」₂），大衆（大量生産様式の受け皿として無構造な中間層），そして都市と国家。

おわりに

第1に⁽¹¹³⁾，歴史の仮晶と名づけるものは，外国の古い文化が土地のうえに，きわめて強く覆い被さっているためにこの土地に生まれた若い文化が十分に大きくなり，そうして自己の真の表現形態を形成することができないのはもちろん，その自己意識を完全に発展させることもできない場合をいう。初期精神態の底（根底）から湧き上がってくるものは，すべて自分の生活ではない生活の空洞形態の中に注ぎこまれ，若い感情は固結して老朽した仕事となり，そうして自己自身の形成力を伸ばすことができないで，遠い力に対する憎しみが大きくなっていくだけである。

第2に⁽¹¹⁴⁾，公共的共同生活の模範としてのギリシア人が発明した民主制は，今日世界的にももちろん，言葉だけによることもあるにせよ—相互承認されているので，唯一の世界の方向へ特殊世界の被制限性を超越する可能性が，事実として承認されていることになる。この承認は，個別科学がその個別性から歩み出て，自らの連関を言葉にせねばならな

(110) M. モース／吉田禎吾・江川純一訳，2009（1925，1950）年。

(111) H. アレント／志水速雄訳，1994（1973）年。

(112) P. コトラー・J. ステリアーノ／高沢亜砂代訳，2020年。

(113) O.A.G. シュベングラー／村松雅俊訳，2017（1976）年，51頁。以上に一部加除および変更あり。

(114) C. ヘルト／小川侃編訳，1994（1976-1992）年，33～34頁。以上に一部加除および変更あり。

いような公共の場（Cコンステレーション場）があること、すなわち民主制国家の研究・科学政策が、今日事実として存在するということの内に表されている。個別科学は、弁明をなす複数のドグマの公共的な対決の中で、自らの特殊世界の研究事業を正当化しなければならない。その際、ありのままの特殊世界の関心に先弁明的に固執することは、原則的に容認されえない。しかし、特殊世界に向けて関心を抱いていること、および特殊世界の個別性をこのように超越〔論化〕していけば、共認不可能性に対しての特殊世界の間の無限の指示連関が垣間見えてくるという好機が既に見い出されている。

そして第3には⁽¹¹⁵⁾、実際、多くの著名な研究者が長らく「あり得ない」として認識してきたものを、「立派にあり得る」として受け入れるとなると、夥しい数の社会的な構造や組織、地位等が立脚している底なし「無底」ではなく普通の語用であろうに「頑丈」とされてきた様々な形の「固定観念」や「評価の物差し」を根底から覆すことを伴う場合—こここまでいけば無底になろうか—がある。しかも、このことは、数論幾何学という数学の一分野に対する「一次的」—FOLではなく直接の意味なのか—な現象に止まる表面的な性質のものではなく、数学とは直接無関係な、一般社会の様々な構造や組織、地位等に対しても少なからず波及効果を及ぼすことは容易に想像がつく。

第1の蹉跌があるコペル君や山猫君は、第2よりは最早、第3のためらいなさの方が気掛かりか。されど、今後連作の保証にもなる第3のことが社会〔選択〕化するに要する年月は、「時空の点に時空がある」というときの将に点である両君にとっても長過ぎることなのか。

〔引用参考文献〕

- Aaker, D.A., 2011, *Brand Relevance: Making Competitors Irrelevant*, Jossey-Bass. (阿久津聡監訳, 2011年, 『カテゴリー・イノベーション』日本経済新聞出版社)
- Barabasi, A-L, 2016, *Network Science*, Cambridge University Press. (京都大学ネットワーク社会研究会訳, 2019年, 『ネットワーク科学』共立出版)
- Bateson, G., 2000 (1972), *Steps to an Ecology of Mind*, The University of Chicago Press.
- Bonneuil, C. and J.-B. Fressoz, 2016 (2013), *The Stock of the Anthropocene: The Earth, History and Us*, Verso.
- Bohm, D., 1980, *Wholeness and the Implicate Order*, Routledge & Kegan Paul. (井上忠雄ほか訳, 2005年, 『全体性と内蔵秩序』青土社)
- Breyer, R.F., 1934, *The Marketing Institution*, McGraw-Hill. (光澤滋朗訳, 1986年, 『マーケティング制度論』同文館)
- Chandler, Jr., A.D., , *Scale and Scope*, ; (A.D. チャンドラー Jr./安部悦生ほか訳, 1993年, 『スケール・アンド・スコープ: 経営力発展の国際比較』有斐閣)
- Christensen, C.M., *The Innovator's Dilemma: When New Technologies Cause Great Firm to Fail*. Harvard Business School Press. (伊豆原弓訳, 2001年, 『イノベーション

(115) 望月新一, 2018年, 9頁。以上に一部加除および変更あり。

のジレンマ』翔泳法社)

Crutzen, P.J., 2002, "Georogy of Mankind," *Nature*, 415(23).

De Waal, C., 2013, *Peirce: A Guide for the Perplexed*, Bloomsbury Publishing, pp. 125-139. (大沢秀介訳, 2017 年, 『パースの哲学について本当のことを知りたい人のために』, 勁草書房)

Einstein, A., 2011, *Out of My Later Years*, Kindle, p. 23.

Gergen, K.J., 2009, *Relational Being: Beyond Self and Community*, Oxford University Press. (K.J. ガーゲン／鮫島輝美・東村知子訳, 2020 年, 『関係からはじまる：社会構成主義がひらく人間観』ナカニシヤ出版)

Gilboa, I., 2009, *Theory of Decision Under Uncertainty*, Cambridge University Press. (川越敏司訳, 2014 年, 『不確実性下の意思決定論』勁草書房)

HaKansson, H. ed., 1982, *International Marketing and Purchasing of Industrial Goods*, John Wiley & Sons.

Haskel J. and S. Westlake, 2018, *Capitalism without Capital: The Rise of the Intangible Economy*, Princeton University Press. (山形浩生訳, 2020 年, 『無形資産が経済を支配する』東洋経済新報社)

Hoffmeyer, J., translated by B.J. Haveland, 1996, *Signs of Meaning in the Universe*, Indiana University Press. (松野孝一郎・高橋美規訳, 1999 年, 『生命記号論』青土社)

Lakhani, Karim R., and Jill A. Panetta. 2007. "The Principles of Distributed Innovation." *Innovations: Technology, Governance, Globalization* 2(3), pp. 97-112.

Lavenda, R. and E.A. Schlitz, 2009, *Core Concept in Cultural Anthropology*, :, 4th ed., McGraw-Hill Humanities Social.

Luft, J., 1961, "The Johari Window," *Human Relations Training News*, 5, pp. 6-7.

Schelling, F.W.J.V., 1809, *Philosophische Untersuchungen über das Wesen der Menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände*, Hofenberg Sonderausgabe.

Sen, A., 1985, *Commodities and Capabilities*, Elsevier Science. (鈴木興太郎訳, 1988 年, 『福祉の経済学：財と潜在能力』岩波書店)

Tanaka, S., 1993, *Japan's Orient: Rendering Pasts into History*, Berkeley.

Varela, F. J., E. Thompson, and E. Rosch, 1991, *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Expedience*, The MIT Press. (田中靖夫訳, 2001 年, 『身体化された心：仏教思想からのエナクティブ・アプローチ』, 工作舎)

Wallerstein, I., 2004, *World-Systems Analysis: An Introduction*, Duke University Press. (I. ウォーラースティン／山下範久訳, 2006 年, 『入門・世界システム分析』藤原書店)

アリストテレス／高田三郎訳, 1971 年, 『ニコマコス倫理学 上』岩波書店

A. スミス／高哲男訳, 2013 (1790) 年, 『道徳感情論』, 講談社

A. ネグリ・M. ハート／水島一憲監訳, 2005 (2004) 年, 『マルチチュード 上下』NHK 出版
同, 2012 (2009) 年, 『コモンウェルス 上下』NHK 出版

A. ネグリ・M. ハート／水嶋一憲ほか訳, 2022 (2017) 年, 『アセンブリ』岩波書店

A. ベッカー／吉田三知世訳, 2021 (2018) 年, 『実在とは何か』筑摩書房

- B. ウィリアムズ／森脇康友・下川潔訳, 1993年, 『生き方について哲学は何が言えるか』産業図書
- B. ラトゥール／伊藤嘉高訳, 2019年, 『社会的なものを組み直す』法政大学出版局
- C.G. ユング／林道義訳, 1999 (1934-1951の論文集) 年, 『元型論』紀伊國屋書店
- C.S. パース著／C. ハートショルン, P. バイス編／米盛裕二編訳, 1985年, 『現象学』勁草書房
- C. ブラウン／村瀬哲司訳, 2020 (2017) 年, 『仏教経済学』勁草書房
- C. ヘルト／小川侃編訳, 1994 (1976-1992) 年, 『現象学の最前線』晃洋書房
- D.T. Suzuki／佐々木閑訳, 2016 (1907) 年, 『大乘仏教概論』岩波書店
- D. グレーバー／高祖岩三郎訳・構成, 2009年, 『資本主義後の世界のために』以文社
同／高祖岩三郎訳, 2006年, 『アナキスト人類学のための断章』以文社
同／酒井隆史・高祖岩三郎訳, 2016年, 『負債論』以文社
- E. シュレーディンガー／岡小天・鎮目恭夫訳, 2008 (1944) 年, 『生命とは何か』岩波書店
- E. バンベニスト／前田耕作監修／蔵持不三也ほか訳, 1986 (1969) 年, 『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集 I II』言叢社
- E.H. シャイン／稲葉元吉・尾川丈一訳, 2002 (1999) 年, 『プロセス・コンサルテーション』白桃書房
- F. ジュリアン／中島隆博・志野好伸訳, 2017 (2002) 年, 『道徳を基礎づける』講談社
- F.J. ヴアレラ著・談／岩見徳夫訳, 1999年, 「オートポイエーシスと現象学」『現代思想』27(4), 80～93頁
- F.W.J.V. シェリング／西谷啓治訳, 1951 (1809) 年, 『人間的自由の本質』岩波書店
- G. ハーマン／上野俊哉訳, 2019年, 『非唯物論：オブジェクトと社会理論』河出書房新社
- G. ハーマン／山下智弘ほか訳, 2017年, 『四方対象：オブジェクト指向存在論入門』人文書院
- G. ランダウアー／大窪一志訳, 2020 (1903) 年, 『懐疑と神秘思想』同時代社
- G.E.M. アンスコムほか／大庭健編／古田徹也監訳, 2021年, 『現代倫理学基本論文集Ⅲ』勁草書房
- H. アレント／志水速雄訳, 1994年, 『人間の条件』筑摩書房
- H. ミンツバーグ／池村千秋訳, 2015年, 『私たちはどこまで資本主義に従うのか』ダイヤモンド社
- H. ロンバッハ／中岡成文訳, 1983年, 『存在論の根本問題』晃洋書房
- I. エクランド／南條郁子訳, 2009 (2000) 年, 『数学は最善世界の夢を見るか?』みすず書房
- I. カント／波多野精一ほか訳, 1979年, 『実践理性批判』岩波書店
- I. カント／篠田英雄訳, 1961年, 1962年, 『純粋理性批判 (上中下)』岩波書店
- J.G.A. ポーコック／田中秀夫訳, 2021年, 『野蛮と宗教』名古屋大学出版会
- J.M. ブキャナン／加藤寛監訳, 1977年, 『自由の限界』秀潤社
- J.O. アームソン／雨宮健訳, 2004 (1988) 年, 『アリストテレス倫理学入門』岩波書店
- J.S. ミル／中村正直 (別称 敬太郎), 1979 (1872) 年, 『自由論』中央公論新社
- J. ゴンダ／鎧淳訳, 2002 (1948) 年, 『インド思想史』岩波書店

- J. マクダウェル／大庭健編者・監訳者，2016 年，『徳と理性』勁草書房
- J. ロック／加藤節・李清和訳，（1689）年，『寛容についての手紙』岩波書店
- K.R. ポパー／内田詔夫・小河原誠訳，1980（1950）年，『開かれた社会とその敵』未来社
- M. ウェーバー／深沢宏訳，2002（1978）年，『ヒンドゥー教と仏教』東洋経済新報社
- M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫訳，1996（1904）年，『社会科学の方法』講談社
- M. カラグプタ／梶山雄一訳，1975 年，『論理のことば』中央公論社
- M. シェラー／樺俊雄・佐藤慶二訳，1935（1926，27，28）年，『哲学の人間学』理想社出版部
- M. モース／吉田禎吾・江川純一訳，2009（1925,1950），『贈与論』筑摩書房
- M. チクセントミハイ／今村浩明訳，1969 年，『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社
- O.A.G. シュペングラー／村松正雅俊訳，1989（1922）年，『西洋の没落Ⅰ』五月書房
同，2017（1976）年，『西洋の没落Ⅱ』中央公論新社
- P. コトラー・G. スティアリアーノ／恩蔵直人監修／高沢亜砂代訳，2020（2018）年，『リテール 4.0』朝日新聞出版
- R. ノージック／嶋津格訳，1985 年，1989 年，『アナキ・国家・ユートピア上下』木鐸社
- R. ノージック／井上章子訳，1993 年，『生のなかの螺旋』青土社
- R. ラジャン／月谷真紀訳，2021（2019）年，『第三の支柱』みすず書房
- R.N. ベラー・島蘭進・奥村隆編著，2014 年，『宗教とグローバル市民社会』岩波書店
- R.P. ドーア／松居弘道訳，1970（1965）年，『江戸時代の教育』岩波書店
- G. ミリカン／信原幸弘訳，2007 年，『意味と目的の世界』勁草書房
- S. モスコヴィッチ／古田幸男訳，1983（1974）年，『飼いならされた人間と野生の人間』法政大学出版局
- V.E. フランクル／真行寺功訳，1972（1951）年，『苦悩の存在論』新泉社
- V.E. フランクル／諸富祥彦監訳／上嶋洋一・松岡世利子訳，1999（1978）年，『〈生きる意味〉を求めて』春秋社
- V.E. フランクル／山田邦夫・松田美佳訳，2004（1984）年，『苦悩する人間』春秋社
- Y.N. ハラリ／柴田裕之訳，2019 年，『ホモ・デウス 上下』河出書房新社
- プラトン／納富信留訳，2012 年，『ソクラテスの弁明』光文社
- 網野善彦，1996（1987）年，『無縁・公界・楽』平凡社
- 安野眞幸，2018 年，『日本中世市場論』名古屋大学出版会
- 池澤優，2002 年，『「孝」思想の宗教学的的研究』，東京大学出版会
- 石井淳蔵，1999 年，「競争的使用価値：その可能性の中心」，石井淳蔵・石原武政編著『マーケティング・ダイアログ：意味の場としての市場』白桃書房，191～211 頁
- 同，1993 年，「消費者需要とマーケティング—石原理論再考—」『国民経済雑誌』，167(1)
- 石原武政，1976 年，「消費者需要とマーケティング」『マーケティング競争の構造』39～70 頁
- 同，1993 年，「消費の実用的理由と文化的理由」『マーケティングの新地平』千倉書房，1～22 頁
- 井筒俊彦，1991（1983）年，『意識と本質』岩波書店
- 稲村徹也ほか編，2022 年，『レジリエンス人類史』京都大学学術出版会

- 井上円了／佐藤厚訳, 2012年, 『現代語訳 仏教活論序説』大東出版社
- 宇井伯壽, 1953年, 『四訳対照 唯識二十論研究』岩波書店
- 宇井伯壽／高崎直道訳注, 1994 (1936)年, 『大乘起信論』岩波書店
- 大熊信行, 2003年 (1929年の復刻版), 『マルクスのロビンソン物語』論創社
- 大熊信行, 2009年 (1964年の増補版), 『日本の虚妄』論創社
- 大塚久雄, 1966年, 『社会科学の方法』岩波書店
- 大塚久雄, 2000 (1946, 1955, 1956, 1967)年, 『共同体の基礎理論』岩波書店
- 大塚久雄／小野塚知二編, 2021 (1955, 1956)年, 『共同体の基礎理論 他六篇』岩波書店
- 桂紹隆, 2021年, 『インド人の論理学』法蔵館
- 桂紹隆・五島清隆, 2016年, 『龍樹「根本中頌」を読む』春秋社
- 加地大介, 2018年, 『もの：現代的実体主義の存在論』春秋社
- 加地伸行, 2011年, 『沈黙の宗教—儒教』筑摩書房
- 同, 2013年 (1977年の大幅加筆修正版), 『中国人の論理学』筑摩書房
- 同, 2015年 (1990年の増補版), 『儒教とは何か』中央公論新社
- 梶山雄一, 2021 (1997)年, 『大乘仏教の誕生』講談社
- 河合隼雄, 2021年, 『宗教と科学の接点』岩波書店
- 同, 2010 (1995)年, 『ユング心理学と仏教』岩波書店
- 河上徹太郎・竹内好, 1977年 (1943, 1959年の合本), 『近代の超克』富山房
- 北畠典生編著, 1997年, 『日本中世の唯識思想』龍谷大学仏教文化研究所
- 橋本峰雄責任編集, 1970 (1892, 95, 98, 1902, 03)年, 『清沢満之 鈴木大拙』中央公論社, 45～231頁
- 空海／加藤純隆・加藤精一訳, 2007 (797)年, 『三教指帰』KADOKAWA
- 同／加藤精一編, 2013年, 『声字実相義』『空海』KADOKAWA
- 九鬼周造, 2012 (1935)年, 『偶然性の問題』岩波書店
- 同, 2011年, 『偶然と驚きの哲学』書肆心水
- 久留間鮫造, 1957年, 『価値形態論と交換過程論』岩波書店
- 黒田俊雄, 2020年, 『王法と仏法』法蔵館
- 小室直樹, 1997年, 『資本主義原論』, 東洋経済新報社
- 小堀桂一郎, 1999年, 『国民精神の復権』, PHP 研究所
- 小堀桂一郎, 2007年, 『日本に於ける理性の伝統』中央公論新社
- 小堀桂一郎, 2010年, 『日本人の「自由」の歴史』文芸春秋
- 酒井直樹, 1997年, 『日本思想という問題』岩波書店
- 榊原昭夫, 2009年, 「解題」, 大熊信行, 2009年『前掲書』
- 白鳥庫吉／榎一雄ほか編, 1971年, 『白鳥庫吉全集 第九巻』岩波書店
- 末木文美士, 2001年 (1970年改訂版), 『東洋の合理思想』法蔵館
- 同, 1996年, 『日本仏教史』新潮社
- 鈴木大拙, 1944年, 「日本の靈性」, 橋本峰雄責任編集, 1970年, 『前掲書』, 235～484頁
- 鈴木大拙, 1972年, 『日本の靈性』岩波書店
- 鈴木大拙／上田閑照編, 1997 (1958～63)年, 『東洋的な見方』岩波書店
- 立川武蔵, 2003年, 『空の思想史』講談社

- 立川武蔵, 1998 年, 『密教の思想』 吉川弘文館
- 玉城康四郎, 2021 (1990) 年, 『悟りと解脱』 法蔵館
- 田村元, 2013 (1937) 年, 「量子論の哲学的意味」『媒介的自立の哲学』 書肆心水
- 津田左右吉／今井修編, 2006 (1934) 年, 『津田左右吉歴史論集』 岩波書店
- 東京大学中国哲学研究室編, 1952 年, 『中国思想史』 東京大学出版会
- 東洋大学井上円了研究センター編, 2019 年, 『論集 井上円了』 教育評論社
- 時枝誠記, 2007 年, 『国語学原論 上下』 岩波書店
- 時枝誠記, 2018 年, 『言語過程説とは何か』 書肆心水
- 富永仲基／石田瑞麿訳, 1972 (1744) 年, 『出定後語 卷上』 中央公論社, 77～123 頁
- 内藤湖南, 1911 年, 『内東湖南作品全集』kindle 版
- 中島隆博, 2022 年 (2011 年の増補版), 『共生のプラクシス』 東京大学出版会
- 中島隆博編, 2021 年, 『人の資本主義』 東京大学出版会
- 長尾雅人, 1978 年, 『中観と唯識』 岩波書店
- 南原繁, 1942 年, 『国家と宗教』 岩波書店
- 西谷啓治, 1960 年, 『宗教とは何か』 創文出版
- 橋川文三, 2015 (1968) 年, 『ナショナリズム』 筑摩書房
- 長谷川博, 2007 年, 「製品政策」中央職業能力開発協会編『マーケティング』 社会保険研究所
- 長谷川博, 2012 年, 「社会交変換論Ⅰ」『千葉商大論叢』 1～19 頁
- 長谷川博, 2014 年, 「社会交変換論Ⅲ」『千葉商大論叢』 17～33 頁
- 長谷川博, 2016 年, 「社会交変換論Ⅳ」『Policy Studies Review』 41～60 頁
- 長谷川博, 2017 年, 「社会交変換論Ⅴ」『千葉商大論叢』 93～109 頁
- 長谷川博, 2019 年, 「社会交変換論Ⅵ」『千葉商大論叢』 23～51 頁
- 長谷川博, 2020 年 a, 「社会交変換論Ⅶ」『千葉商大論叢』 45～69 頁
- 長谷川博, 2020 年 b, 「社会交変換論Ⅷ」『千葉商大論叢』 95～121 頁
- 長谷川博, 2021 年, 「螺旋のパンドラと括握的ひらけの希望」『千葉商大論叢』 167～182 頁
- 早島鏡正ほか, 1982 年, 『インド思想史』 東京大学出版会
- 富貴原章信, 1989 年, 『日本唯識思想史』 国書刊行会
- 法蔵・宗蜜／小林圓照・木村清孝訳, 1989 年, 『大乘仏典 中国・日本編』 中央公論社
- 法然／大橋俊雄校注, 1997 (1204) 年, 『選択本願念仏集』 岩波書店
- 本田勝一, 1984 年, 『殺す側の論理』 朝日新聞社
- 松本健一, 1994 年, 『隠岐島コミュニケーション伝説』 河出書房新社
- 松本侑子, 2013 年, 『神と語って夢ならず』 光文社
- 丸山眞男, 1952 年, 『日本政治思想史研究』 東京大学出版会
- 同, 1964 年 (1957 年の新装版), 『現代政治の思想と行動』 未來社
- 三浦つとむ編／上田博和ほか, 1981 年, 『現代言語学批判—言語過程説の展開』 勁草書房
- 宮坂宥勝・梅原猛, 1996 (1968) 年, 『生命の海 〈空海〉』 KADOKAWA
- 望月新一, 2018 年, 「刊行によせて」, 加藤文元, 2019 年, 『宇宙と宇宙をつなぐ数学』 KADOKAWA。IUT 理論の論文は以下にある。<http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/~motizuki/research-japanese.html>

- 森和也, 2018年, 『神道・儒教・仏教』 筑摩書房
- 森哲郎編著／西田幾多郎・西谷啓治ほか, 2000年 (1943年などの合本), 『世界史の理論』
燈影舎
- 文部省思想局, 2018 (1937) 年, 文部省教学局, 2018 (1941) 年, 『国体の本義・臣民の道』
呉 PASS 出版
- 柳父圀近, 2016年, 『日本のプロテスタンティズムの政治思想』 新教出版社
- 老子／王弼注／楼宇烈校釈, 2010年, 『老子道教経注』, 中華書局
- 老子／井筒俊彦／古勝隆一訳, 2017年, 『老子道德経』 慶應義塾大学出版会
- 老子／安富歩訳, 2017年, 『老子の教え』 ディスカヴァー・トゥエンティーン
- 山内得立, 1974年, 『ロゴスとレンマ』 岩波書店
- 山内得立／酒井修編, 1993年, 『随眠の哲学』 岩波書店
- 山田広昭, 2020年, 『可能なるアナキズム』 インスクリプト
- 山本七平・小室直樹, 2016年 (1981年の再刊行), 『日本教の社会学』 ビジネス社
- 横山紘一, 2016 (2002) 年, 『唯識の思想』 講談社
- 吉本隆明, 1968年, 『共同幻想論』 河出書房
- 同, 1983年, 『物象化論の構図』 岩波書店
- 和辻哲郎, 2007 (1934) 年, 『人間の学としての倫理学』 岩波書店

(2022.5.20 受稿, 2022.7.13 受理)